



第8回AMASC世界大会

——異文化間の交流——

1986年3月16日～21日

第8回 AMASC世界大会

—異文化間の交流—

目 次

開会の祈り	聖心会日本管区長 シスター速水	5
開会のことば	AMASC会長 小堀 玲子	7
皇太子妃殿下お言葉		9
歓迎のことば	学校法人聖心女子学院理事長 シスター伊庭	11
挨拶	聖心女子大学学長 シスター内山	13
議事報告		15
AMASC 書記の報告		19
AMASC 会計報告		21
AMASC 理事会メンバーによる活動報告		23
各国会長報告		29
「異文化間の交流」研究及び グループディスカッションに関する報告	準備委員会テーマ委員	41
AMASC 東京大会基調講演	上智大学教授, 元 AMASC 顧問 緒方 貞子	43
「非キリスト教社会, 又, キリスト教社会 におけるキリスト者」	ステファノ 浜尾文郎司教	51
講演	上智大学教授 グレゴリー・クラーク	59
各国よりのレポート要約		67
グループ・ディスカッションの内容報告		79
第 8 回 AMASC 世界大会決議文		85

開会の祈り

聖心会日本管区長

シスター速水

主よ

まずはじめに、第8回AMASC国際会議に世界各国からの同窓生を、日本にお迎え出来る喜びをお与え下さいましたことを心から感謝いたします。この会議と私達の努力の成果を、この会議のもたらすすべての成果を、主にお委ねいたします。

「いつの日か東洋まで、主の愛のみ国が広がり、そこで修道女や子供達が主の聖心のうちにひとつに集まることを……」聖マグダレナ・ソフィアが180年前、心に描かれたこのヴィジョンは、主よ、あなたのおはからいによって、今日この場で現実のものとなりました。

今会議は、異文化間のコミュニケーションをテーマとして選びました。異なった文化を持つ人人に愛をもって接する主、あなたこそ異文化間のコミュニケーションの生きた模範です。私達は、主が私達に個人として、またグループとして、主の模範にしたがって生きるよう、主が歩まれたように歩むよう、呼びかけておられることを強く感じます。

主よ、異文化間のコミュニケーションを主の精神に沿って具体的に生きるには、どうしたらよいか共に探し求めている私達を、助け導いて下さい。

この度の東西の出会い、心と生活のわかちあいによって、聖心会と同窓会の絆がさらに強まることを心から祈ります。そして、多様な文化の豊かさに生きる私達が、ひとつとなって引き裂かれた世界に一致と交流をもたらすために少しでも貢献できますように。

私達一人ひとりを、そしてこの会議をお祝下さい。会議に参加した一人ひとりが開かれた心、開かれた精神で異文化間のコミュニケーションについての主の教えを、互いに知識としてだけでなく、現実の体験として学ぶことが出来るよう、その恵みをお与え下さい。聖マグダレナ・ソフィアの御取り次ぎによってお願いいたします。

至聖なるイエズスの聖心 我らをあわれみ給え

聖マリアのけがれなき御心 我らのために祈り給え

聖マグダレナ・ソフィア 我らのために祈り給え

第8回 AMASC 世界大会 (1986)

開会のことば

AMASC会長

小堀玲子

管区長様、両妃殿下、そして親愛なるAMASC会員と友人のみなさま。

16年前、第二代AMASC会長の Maria Ignacia —— 今日嬉しいことに、ここに出席されておりますが —— が、東洋への、会長としての公式訪問旅行に際し、日本に立ち寄られ、ところも同じこのマリアンホールで日本の聖心同窓生に呼びかけられた時、AMASCは初めて公式な東と西の交流を果たしたわけであります。Maria Ignacia の説かれた世界にひろがる聖心の家族としての自覚を持つことの必要性は、日本の同窓生の中に強く残り、やがて日本同窓会のAMASCに於ける東西問題研究の役割へと発展いたしました。今日、AMASCは遂に史上初めて東洋で大会を開くことが出来たわけであります。AMASC執行部と私は、24,808名のJASH会員と共に、この様に皆様一人一人を歓迎出来ることを、大変な特権と思っております。

皆様は海を渡り“Cor Unum” —— 一つの心 —— の精神をわかち合い、私共が過去4年間、すべての努力を傾けた「対話」の実行を果すために集まられました。そしてここで聖心の教育の国際性と多様性を同時に目撃されるでしょう。又、皆様は、聖心会のシスター方が私共が下された全てのものに対する愛と感謝の表現も見つけられるでしょう。シスター方がいらっしゃらなかったら、私共は現在の私共ではあり得なかったのです。海外からの皆様は、日本の同窓生によって選ばれた、日本の真の姿の一面も見られるでしょう。これらのことこそ、第8回AMASC大会の準備委員会が皆様に提供しようと努力したことなのです。

この努力に対して、皆様は寛大に迎え世界の隅々から参加して下さいました。AMASC加盟37ヶ国の中、24ヶ国が本大会に代表を送っております。皆様の出席こそが、私共が最も感謝したいことなのです。日本聖心同窓会 —— JASH —— は三田千世会長のもとに世界の聖心家族のため働く機会を与えられたことを、私共執行部と共に感謝したいに違いありません。

サンフランシスコに於ける第7回AMASC大会の決議は「共通の教育の伝統に結ばれた女性の集団としての力を自覚しつつ、AMASCは世界の全ての人々のより深い相互理解のため邁進する」と述べております。この決議に準じ、私はAMASCの中のさまざまなグループのより緊密な協力の必要性を呼びかけて参りました。即ち私共は 1) AMASC創成期の意気を再びとり戻すため、AMASC前執行部、顧問などのメンバーと、 2) AMASCの次の20年を計画するため、若い会員と、 3) AMASC会則にうたわれている理想の実現のため、シスター方と、それぞれより緊密に連絡をとろうと致しました。その結果は、非常に実りあるものであったと思います。即ち 1) “AMASC Veterans” チームが発足し、私共執行部にはかりしれぬ援助を与

え、2) 各国に於て、「若い」会員を国内の活動に参加する様呼びかけただけでなく、国際的レベルでも、より重要な役割を分担させ、3) ローマの聖心会総長、Sr. Helen McLaughlin から常に寛大かつ愛に溢れた支持をいただきました。これらのグループそれぞれから、これほど沢山の出席者があったことは、とりも直さずそれらの違ったグループのAMASCに対する関心と熱意の現れとして私共は幸せに感じております。

これらのことのもたらす喜びと感謝の念を以て、私は皆様に、御一緒にすごせる日々を十分に活用して下さるようお願いしたく思います。この大会の成功は皆様一人一人の、いかに心を広く開き、自分と違う文化や考え方のの人々と対話をするかの努力にかかっていると云えましょう。そして実りある6日間が終って、私共がそれぞれが働かねばならぬ場に、我々が聖心の教育で学んだ一つの「愛」を周囲にわかつという共通の目的を確信しつつ戻って行けたなら、私共の努力は十二分に酬いられたと申せましょう。終りにあたり、私の執行部のメンバーを御紹介いたします。右から左へ、副会長山本千代子、書記堀田公子、前任者は甲斐啓子、会計等松史子、インターナショナルホスピタリティ係中沢雅、そしてニュースレター編集長野村寿子の諸姉でございます。このメンバーのAMASCへの献身と、私と共に世界の全ての同窓生のために働き、その間のすべての喜びも、心配も、楽しいことも、悲しいこともわけ合って貰えたことに、私が心から誇りを感じていることをつけ加え御挨拶を終わります。有難うございました。

皇太子妃殿下お言葉

修道女及び同窓の皆さま、今朝、ここに皆さま方と共に、第8回世界聖心同窓会会議の開会をお祝い出来ますことを、本当にうれしくおもいます。又、日本の聖心の卒業生の一人として、海外からいらして下さったお客様を、心から歓迎申し上げます。皆様方の御出席なしに、このつどいを実現することは出来ませんでした。

会議の準備にあたり、日本同窓会の皆様が、ここ数年にわたって行われた素晴らしいお仕事に対しても、私は深い敬意を表したいと思います。国内幾つもの同窓会が、力を合わせて準備をなさったその過程は、すでにそれ自体、「対話」「交流」を主題とするこの会議にふさわしい序章となっており、心強い思いがいたします。皆様の払われた大きな努力が、この会議において、どうぞ良い実を結びますように。

私共の生きるこの地球時代ともいえる現代において、異文化間の交流は、すでに欠くことの出来ないものとなっています。人類の歴史の上で、国際間の平和維持に、今程対話が必要とされている時は例を見ません。私は、AMASCの活動が常にこの世界の要望に沿ってとられて来たことを、高く評価したいと思います。小冊子の中で小堀会長が書いておられる通り、過去4年にわたりAMASCの目標は、37カ国の姉妹校の間に真の対話を成り立たせることでありました。この第8回会議が、過去の会議の歴史に少しでも意義あるものを加えていくことの出来ますよう念じております。

この主題に関し、私個人の意見を申しますよりも、私は皆様方と共に一時^{ひととき}、母校の創立者聖マダレナ・ソフィアと、その生涯の背景をなす時代とに、私共の想いを向けたいと思います。現代とは様々な面で問題を異にするとはいえ、聖女の生きられた時代も又、フランス革命に引き続く、おびただしい変革と地域的交流の時代でございました。この時期に当たり、フランス、イタリア、スペイン、オランダ、ドイツ、英国、南北両アメリカに学校を設立され、その過程において、国籍も階層も異なる人々との間に常に良き人間関係をもたらされた創立者は、その叡智をもって今世紀の私共をも啓発し、導き続けておられるように思います。

その生涯にきわ立つ特徴は、愛とつつしみでありましたが、この特性は、そのままいつの世にも、人々の行動の根底に望まれるものに思われます。文化のへだたりを超える交流においても、私共はまず知識を求めますが、もしこの知識が、愛の導きに従って求められたものであったなら、恐らくそれは、よりよい理解へ、そして更には共感へと、奥深く道を進むのではないのでしょうか。

又、知識を過信し、短期間に他人や他国を熟知したような錯覚を持たぬよう、つつしみを持って自他を知ることも大切に思われます。

私共は皆この時代に生まれ、そして今を生きつつ、新しい叡智に到り、それを歴史に加えていくことを求められています。私共が手をたずさえ、この目標に向かって歩く時、どうぞ過去からの

光が、私共の道を照らして下さるように。そして、自分をも他人をもそのあるがままに受け容れて共に歩もうとする時に、創立者の持たれた慈愛と忍耐とが、私共の導きであって下さいますように。

終りにあたり、この度の私共の招きをお容れになり、年月をへだて、今再びこの母校をたずねて下さったシスター方に、御挨拶を申し上げます。シスター方——もし出来れば普通、マザー方、とお呼びしたいのですが——本当に、よく帰っていらして下さいました。皆様方は、創立者のかかげられた、その同じ灯によって、かつて私共の道を照らして下さいました。今、手探りに明日の世界へと歩みを進めつつ、その灯により与えられた励ましの大きさを思います。この度の御再訪を、教え子達は皆、温かい感謝と共に迎えたいました。シスター方、又、海外から参加して下さいました同窓生皆さまが、どうぞ私共の国で、楽しく良い日々をお過ごし下さるよう、お祈りいたします。

歓迎のことば

学校法人聖心女子学院理事長

シスター 伊庭

会長、皇太子妃殿下、並びに三笠宮妃殿下、世界各国からの同窓生、シスター、初来日の方々、この貴重な機会に帰国されたシスター方。

小堀会長から第8回AMASCの開会式で歓迎の言葉を述べるように依頼がありました時、どのように皆様にお話ししてよいか、とまどいました。そこで私は、あたかも懐かしき母校を訪ねて下さる同窓生を迎える校長のようにお話しをすればよいのではないかという考えに至りました。ですから、まず日本の聖心によろこそいらして下さいました、皆様をお迎え出来、大変嬉しく存じますと、申し上げます。

この機会に、皆様が代表される各国の聖心ファミリーに深い感謝の意を表したく存じます。JASHが準備されましたパンフレットでお読みになったかと存じますが、聖心会は教皇ピオ十世の要請により、1908年に日本に派遣されました。その目的は、キリスト教に基く女性の高等教育でありました。古い文化と何世紀にもわたるキリスト教迫害の歴史を持つ日本で、このような目的を果たさねばならない教育ミッションは、特別な配慮をもって計画され、人選がなされました。新しい聖心会を設立する場合、責任はある国、あるいは、ある一つの管区に課されるのが通常です。しかし、日本で聖心会を設立する目的を持つミッションは、初めから終わりまで一貫して国際的事業となりました。日本における聖心会発足後の10年間に39名のシスターが滞日されましたが、その方々の国籍からも、いかに日本聖心会が国際色に富んでいたかおわかりいただけると存じます。39名の内、アイルランドから12名、ドイツから7名、フランスから6名、イギリスから5名、オーストラリアから4名、ベルギーから3名、ニュージーランドから2名が来日いたしました。日本聖心会の歴史のユニークな基礎作りの一例であると存じます。これらの方々につき、更に数多くの国々から宣教師が来日しました。第二次世界大戦の間、聖心会の教育事業のほとんどが破壊されてしまいました。そうして私共は、再び世界中の聖心ファミリーの愛と援助の対象となりました。世界中から食料品、衣類、資金の形で援助は私共に届きました。ここで、その一例、しかも伝説になってしまったお話をいたしましょう。戦後のある日、Reverend Mother de Lescureは、Kenwoodを訪問されておりました。その時、時計台の時計が動いていないように思いました。そこで、何故直さないのかお尋ねになりましたところ、Reverend Mother de Bodkinは、言葉少なく、こう答えられたということです。「1ペニーでも節約して、東京に送っている。」と。その為、時計台の時計は壊れたままになっていたのです。そこで、その時計は総長のお金で修理される事になりました。私共の思い出の中に、時計台は聖心ファミリーの国境を越える愛と寛大さの象徴として、未だに心に強く残っております。

本日お集まりの親愛なる皆様方は、この時計台の伝統を持つファミリーの代表です。皆様方は、ここでの交流のテーマとして、異文化間のコミュニケーションを選ばれたと伺っております。私は、このテーマをある深い感動と、ある種の尊敬を覚えながら受けとめております。約400年前、聖フランシスコ・ザビエルは、地球を半周して日本にキリストの知識と愛を伝えました。約80年前、聖心会の宣教師は、この聖人の後をしたい、日本に来ました。両者共、日本の古い文化を尊重しつつ、その文化の中にキリストの教えをもたらしたのです。今日、かつての小さかった聖心ファミリーは大きく育ちました。それは東と西、南と北との集いを東京で開催出来るほどに育ちました。日本聖心会の誕生と成長を可能にして下さった皆様方、ならびに世界中の聖心ファミリーに感謝いたします。見事に成長されたJASHには、「おめでとう」を申し上げたく存じます。

昨日、このミサで皆様方にお会いしました時、一つの祈りが私の心に湧き出しました。「神のために、このような集いが私共だけのためにだけでなく、全世界のためのものでありますように。」数年前、教皇が来日された際、教皇は自らを平和の巡礼者と称されました。皆様方も、多様な文化の中で交流を求める巡礼者です。皆様方も、この集いで、対話の精神、愛、そして誠実をもってお互いに交遊を深めていただきたいと思います。そして聖心ファミリーを越える交流と平和の巡礼者として帰国される事を念じております。それこそ皆様一人一人は、現代において、聖マダレナ・ソフィアが思い描かれるような聖心の使徒となられるのではないのでしょうか。

挨拶

聖心女子大学学長

内山孝子

皆様をここ東京の聖心女子大学にお迎えできますことを、私共は大変名誉に且つ光栄に存じます。国際平和年である年に「御託身の秘義」が実現される場となる特別な機会に恵まれましたことを深く感謝いたしております。新年の挨拶でローマ法王ヨハネス・パウロ2世は、次のようにおっしゃっております。「平和に国境はない。東西、南北いずこも民は一つ、平和は一つ。」と。このローマ法王のお言葉も、今このキャンパスで現実のものとなっておりますことを感じます。今日ここに、皆様がこうして集まられているという事は、創立者聖マダレナ・ソフィアが御自分の小さな聖心会に託された夢——即ち魂と心を以ての一致の内的力を雄弁に証しするものでございます。

皆様もすでにご存じのように、このキャンパスは、久邇宮家所有のものでございました。37年前の1948年、聖心女子大学が文部省により認可されました時、そこには僅か二つの建物しかたっておりませんでした。即ち、宮殿（パレス）と宮殿（パレス）とは全く対照的な教室としてのカマボコ兵舎でございました。しかし、それ以来、全世界の聖心の方々から精神的、物質的御支援を頂きまして、現在の規模にまで発展してまいりました。今ここに日本同窓生を代表して、東洋に聖マダレナ・ソフィアの教育理念を築くことを可能にして下さいました世界中の聖心の皆様に、“Thank you,” “Merci,” “Gracias” と申し上げたいと存じます。AMASCに出席しておられる間、皆様一人一人がこのキャンパス内でおくつろぎいただければ幸いと、心よりお祈りいたしております。本当に本日はようこそおいで下さいました。そろそろ昼食の準備もできたようでございますので、昼食会の会場の方へお移りいただきたいと思います。

議 事 報 告

第8回AMASC世界大会の議事は3月17日と21日に4回にわけて開催された。AMASC会長小堀玲子がAMASC付則4章 a-4項により議長をつとめた。

第1セッション（3月17日 10:00-12:00）

定足数——この集会には、37加盟国より22ヶ国の同窓会が会長または代理によって出席しており定足数を満たしている。（AMASC付則4章 6-d 項参照）

有権者数——これら22ヶ国代表及びAMASC会長が投票権を持つ。（付則4章 a-4項参照）

新加盟——カナダ聖心同窓会（CASHA）はこれまで米国聖心同窓会（AASH）の一員としてAMASCに加盟していたが、今後は直接AMASCに加盟することになった旨議長が報告。

執行部よりの報告

1) 書記の報告——書記が4年間のAMASC活動報告をした。（別頁執行部報告参照）

2) 会計報告——会計が4年間の活動報告をした。（同上参照）

会費の支払いが滞っているため、AMASCが財政危機に直面していることを説明。年間、各国にニュースレター等を発送するための通信費のみで、一国につき最低50ドルが必要である。この問題に対して会計は3つの解決案を示した上、各国会長に熟考を促した。解決案は次の通り。

- ① AMASCの最小限度の活動費を確保するため一国あたりの最低年会費を定めること。
- ② 会員一人あたりの会費を上げること。
- ③ AMASC活動を縮小すること。

議題提出——以上の会計の説明を受けた上で、財政問題を議題として取り上げるよう、日本より提案があった。満場一致でこの提案がとりあげられた。討議は21日に行われる。

会則改正の動議

1) 「聖心会との連絡係」を会則から削除すること——イタリア提案

この改定案を検討するかについては会則4章7項により、1/3の賛成が必要。19ヶ国が賛成したので特別委員会が作られた。（付則7章13項参照）委員に任命されたのは出席している4人の顧問及びイタリア同窓会会長。

2) 「人権問題連絡係」を付則に追記すること——オーストラリア提案

この動議は支持され、4人の顧問とオーストラリア会長による特別委員会が作られた。

所信表明演説

1) 次期会長候補——コロンビアの Beatriz Salazar de Mejia が所信表明を行った。

Maebh Lennan (アイルランド—ベルギー) は候補を辞退する旨連絡があったが、会議の直前であったため投票用紙には両候補の名前が記載されていることを議長が説明。

2) 理事会顧問候補——10人の顧問候補が国名のアルファベット順に所信表明を行った。欠席した3人の候補者のスピーチは代読。10人の候補者は次の通り。

Patricia Burns (オーストラリア)

Christine-Bibiane Achleitner (オーストリア)

Beatriz Restrepo de Echavarría (コロンビア)

Maebh Lennan (アイルランド—ベルギー)

Maria Franca Migone de Amicis (イタリア)

中山洋子 (日本)

Marichu Aranguren de Rosales (メキシコ)

Felicity Rennie (ニュージーランド)

Pepa Lozano Mantecon (スペイン)

Maryliz Ruhl (米国)

第2セッション (3月17日 13:00—16:30)

活動報告

- 1) 理事会メンバーによる報告——AMASC顧問とその他理事会メンバーが、活動報告を行った。(執行部報告参照)
- 2) 各国同窓会会長——各国同窓会会長が、国名のアルファベット順に活動報告を行った。(各国同窓会会長による報告参照)

第3セッション——非公開 (3月21日 8:00—9:00)

財政問題討論——各国会長は第1セッションに於て動議された財政問題に対して真剣に討議した。各国は異った状況にあり、異った問題をかかえているが、AMASCの財政危機に対して何かをしなければならないという点で意見が一致した。最終的には、AMASCの年会費を一人あたり20セントから50セントにあげると同時に、一国あたりの最低責任額を50ドルとするという結論に達した。それ以上の余裕がある場合に振り込むことのできる口座を設けようということになった。

第4セッション (3月21日 9:30—11:00)

財政問題に関する討議の報告——日本同窓会会長三田千世が財政問題に関する討議の報告をした。この報告に加え、小堀議長が出席者に対して、1985年に、設立20周年を迎えたAMASCの誕生祝いに1ドルの寄付をしようではないかと呼びかけた。満場一致の賛成によりその場で献金を募った。

会則改正——Maryliz Ruhl (米国よりの顧問) が会則改正委員会の報告を行った。

1) 「聖心会との連絡係」の削除

イタリアより提出されたこの改正案を委員会としては受け入れの方向でこの会議にかけたい。最近では、卒業生と聖心会の連絡は密であり、連絡係は必要ではないことを説明。AASH (米国同窓会) の Patricia Sheehan がこの改正案を議決するよう動議、支持された。会則改正には、2/3以上の多数決が必要であるが(会則4章7項参照)、21ヶ国がこの改正案に賛成したためこの動議は可決された。この件に関する会則各項を改正するのは次期理事会の責任である。

2) 「人権問題連絡係」を付則に追記すること。特別委員会で討議の結果、オーストラリア提出の「人権問題連絡係」についての条項の中で、「AMASC会長は人権問題連絡係を任命すべきである」という所を「することができる」と改めた方がよいということになった。その他、委員会の話し合いであがった点は次の通り。

- ① 特別委員会は「人権問題連絡係」の重要性を認めるが
- ② AMASCが財政的にそれを維持できるか
- ③ 過去三代の会長任期中、付則に「人権問題連絡係」に関する規定がなかったが、「人権問題連絡係」は存在し、有意義な活動をしていたこと
- ④ 顧問の一人を人権問題連絡係に任命するという可能性もあること

これに対して討議が行われた。米国の Sr. Morris から、「人権問題連絡係」というのは大変重要な役割なのであるから「すべき」という表現を残すべきだという発言があった。現AMASC人権問題連絡係である P. Horsley がこの意見に賛意を表した。一方、WUCWO 代表 S. V. Plancke と OMAAEEC 代表 Carmen R. de Marin は、AMASCは加盟している他の世界的な組織を通して人権問題のために働くことができるし、一人の人が世界各地をまわるとするのは現実的でないという意見を述べた。

投票が行われた。「Yes」は委員会によって一部修正された「人権問題連絡係」に関する条項を付則に加えることを意味し、「No」は付則は現在のまま残すことを意味する。

結果は次の通り

Yes 7

No 16

付則の改正には過半数が必要であるから(付則7章13項参照)この動議は否決された。

選挙

付則4章6—f項によれば、AMASC会長と理事の選挙の際、各国が持っている投票権は会費を払っている会員数に応じて決められている。今回は全部で31票がある。

1) 会長選挙——結果は下記の通り

Beatriz (コロンビア) —30

Maebh (アイルランド—ベルギー) —0

従って Beatriz Salazar de Mejia が当選。また、副会長候補 Maria Luisa Largacha de Escallon が自動的に副会長となる。(付則4章7条b-2)

2) AMASC 顧問選挙——各国会長は投票用紙にある次期顧問の候補者名中2人に印をつけた。得票数の多い順に4人が選出された。

Maria Franca Migone de Amicis (イタリア) ——27

中山洋子 (日本) ——23

Maryliz Ruhl (米国) ——23

Patricia Burns (オーストラリア) ——21

新AMASC会長挨拶——新会長に選出された Beatriz Salazar de Mejia が就任演説を行った。その中で新会長は神と聖マグダレナ・ソフィアに信頼して自己の最善を尽すという決意を述べた。新会長は次の3点の重要性を強調。

1. 東西及び南北が絶えず交流すること
2. 若い人々をAMASC活動にひきつけること
3. 聖心会シスター方と協力し、シスター方が私たちに下さったことを実践すること

最後に新会長は、この大会によって成就した真の交流が今後失われるべきではないと結んだ。

残りの顧問選出——新会長は2人の顧問を指名した。

Marichu Aranguren de Rosales (メキシコ)

Pepa Lozano Mantecon (スペイン)

大会決議——本大会決議案が三ヶ国語で読まれ満場一致で承認された。

会長へ拍手——任期を終える小堀玲子会長に対して盛大な拍手が送られた。

会長の感謝のことば——小堀会長は、自分と執行部が世界中の同窓生のために働く機会を与えられたことに対し、AMASC全会員に感謝のことばを述べた。また、全シスター方の協力(特に会期中)に対し、又、陰の力となって働いてきた何百人もの日本人同窓生に対し感謝をあらわした。そして新会長に、出来る限りの協力をすることを約束した。

11:00に散会した。

AMASC書記

堀田 公子 記

AMASC 書記の報告

1986年3月

1982年から1986年までの主な活動について

- 1982年
- サンフランシスコ大会後、これまでの役員経験者に呼びかけ、「AMASCベテラン」として会長の諮問機関を作る。11名が承諾。
 - 7月 AMASC会長より各国会長宛の手紙発送、以後在任中7通発送。
 - 9月 会長、副会長、オーストラリア訪問。オーストラリア聖心同窓会出席。
 - 10月 ヨーロッパ各国会長会議、ミラノにて開催。以後会長在任中毎年開催。
 - 12月 ニュースレター第1号発行。以後7号まで発行。
 - 12月 聖心会新総長 Sr. Helen McLaughlin より AMASC 支援のメッセージ。
 - 第8回AMASC世界大会のための準備委員会設立。
- 1983年
- スペインとアメリカ合衆国で若い会員相互の交流計画開始。
 - 9月 聖心会総長 Sr. McLaughlin 訪日。執行部と会見。
- 1984年
- 8月 ヨーロッパで Sacred Heart Outreach to the World (S.H.O.W.) 運動開始。若い会員相互の友好を図る。
 - 9月 AMASC理事会。海外より7人のメンバーを迎え東京にて開催。1986年東京大会の計画を含め様々な問題を討議。
 - 第1回AMASC国際エッセイコンテストを若い会員に呼びかける。テーマは「私にとって聖心で受けた教育はどのような意義をもっているか」。優勝者は、1986世界大会に招待される。
- 1985年
- 4月 会長及び執行部、米国聖心同窓会出席。その後コロンビア、メキシコを訪問。
 - 夏 日本の若い同窓生、オーストラリアでホームステイの旅。
 - 会長、メキシコ及びコロンビアの災害に対する援助をAMASC全会員に要請。
 - 9月 会長、第8回AMASC世界大会を告知。関連書類の発送。
 - 10月 会長、マジョルカ島バルマで開催されたヨーロッパ会長会議に出席。
 - ラテンアメリカ会長会議、コロンビアのボゴタにて開催。
- 1986年
- 3月 第8回AMASC世界大会、東京にて開催。
- WUCWO及びOMAAEECの活動は別途記載。

AMASC書記

堀田 公子 記

AMASC 会計報告

1982年5月—1986年1月

円 収 入

アメリカ合衆国より振替	¥ 1,826,190
83年, 84年, 85年度分会費	1,576,055
JASH及びAMASC会員より寄附	288,241
銀行利息	13,616
ドル口座より	614,400
計	4,318,502
	¥ 4,318,502

円 支 出

郵送費	¥ 415,995
備品費	144,927
印刷費	138,967
旅 費	2,876,757
電話代	28,140
銀行手数料	87,388
接待費	76,320
WUCWO, OMAAEEC会費	159,970
雑 費	363,238
計	4,291,702
	¥ 4,291,702

1986年1月現在の円差引残高

¥ 26,800
(≒ 111.67ドル)

米ドル収入

アメリカ合衆国より振替	\$ 2,030.00
83年, 84年, 85年度分会費	9,230.32
寄 附	100.00
銀行利息	148.41
計	11,508.73
	\$ 11,508.73

米ドル支出

WUCWO, OMAAEEC会費	\$ 420.00
------------------	-----------

旅費	1,396.00
円口座に振替	2,500.00
計	4,316.00
	\$ 4,316.00
1986年1月現在の米ドル差引残高	\$ 7,192.73
1986年1月現在の総計差引残高	\$ 7,304.40

主要支出

主要旅費

小堀, 山本, オーストラリアへ	¥ 790,401
小堀, 米国, コロンビアへ	540,800
山本, 米国, コロンビアへ (半額)	236,500
小堀, ヨーロッパ会長会議へ (半額)	312,200
Lennan ヨーロッパ会議へ	176,634(\$ 658)
S. van der Plancke WUCWO会議へ	194,234
Ruhl AASH会議へ	\$ 358
Carmen OMAAEEC会議へ	\$ 380
理事会出席者 1984年度東京会議へ (半額)	590,098

主要雑費

ヨーロッパ同窓会への寄附 (ハンガリー・ポーランド同窓生)	¥ 255,988
ミサ献金	60,000

主要接待費

理事会メンバーのシスター方とお茶会費	¥ 15,000
花代	10,000
シスター方のビンゴの券購入費	15,000

AMASC 理事会メンバーによる活動報告

顧問団

出席者

Trish Burns (オーストラリア)
 Bibiane Achleitner (オーストリア)
 Felicity Rennie (ニュージーランド)
 Maryliz Ruhl (米国)

欠席者

Maebh Lennan (アイルランド — ベルギー)
 Mariana Ulloa de Baena (コロンビア)

活動報告の要旨は以下の通りである。なお欠席者の報告書は代理人が代読した。

Trish Burns

国際的なホスピタリティー・ネットワークを作ろうという大きな希望を抱いて、サンフランシスコ大会より帰国。まずオーストラリアの同窓生に自分達が世界の同窓生のために出来ることを尋ねてみた。オーストラリア各地の90の家庭から様々な形のホスピタリティー提供の申し出があった。小堀玲子さんと山本千代子さんのオーストラリア訪問もオーストラリアの同窓生のホスピタリティーを促進するのに絶大な効果があった。世界の同窓生にオーストラリアの申し出を伝え、各国のホスピタリティー提供の可能性を打診したところ、熱心な反応もいくつかあった。私達の努力の一つの成果は、1985年に日本の若い同窓生のオーストラリア訪問が実現したことだった。

(国際ホスピタリティー・ネットワークの連絡先リストは別紙の通り)

1984年の会長会議に出席。この会議は若い人達にAMASCの活動への参加を求めること(例えばエッセイ・コンテスト等によって)という成果があった。

Bibiane Achleitner

過去4年間の私の最大の仕事は、東西間の理解を深めることだった。そのために、私自身も知識を得るよう努力し、オーストリアでは「東」の国々をよりよく理解するための研究グループも作られた。その成果は、1984年にエジンバラで開かれたヨーロッパ会長会議で発表報告され、その結果ヨーロッパ各国でも同様の研究グループが作られ成果をあげた。

私のもう一つの仕事は、Maebh Lennanと共にヨーロッパ地域を担当することだった。私の分担はドイツ語圏だった。

Felicity Rennie

小堀玲子さんの任期の初めに、「人権問題連絡係」の Patricia Horsley を補佐するよう要請された。米国、南米、ヨーロッパ各国を訪問、各地でシスター方、同窓生と交流するうちに、東欧、特にポーランドとハンガリーが最も私の力を必要としていることがわかってきた。そこで私が直面したのは、最大のそして唯一の目的が、人間からその尊厳と品位を奪うことであるという機構だった。人々の、神を礼拝する権利を否定する——これほどの人権侵害があるだろうか。激しい憤りを覚えると同時に、ポーランドとハンガリーの人々の不屈の勇気に唯々頭が下がるばかりだった。常に神の助力を求めること——何が起ころうとも神が味方になって下さると信じること——ポーランドとハンガリーの人々の信仰はこのことに尽きる。

東欧の人権蹂躪（じゅうりん）と対照的なのが、世界の他の国々で日常茶飯事となっている人権侵害行為である。国際的に報道されるはっきりとした、劇的なものもあれば、気がつかれずに、問題にもされずに過ぎるものもある。私達みんなに関わりのあるこの問題について何とか人々の認識を高める方法はないものかと考えている。言葉というものは、誤解を招くものだというのもわかった。「根本的な変化」とか「解放」とかは言語によって意味が違う。皆さんにアンケートを配って各々の国で起こっている人権問題に目を向けてほしいと思っている。質問の草案を渡すので、アンケートの提起している問題を変えないよう留意しつつ、各同窓会で翻訳していただきたい。

Maryliz Ruhl

私の仕事は、AMASCのニュースを北米地域に伝えることだった。そのため、ニュースレターを始めた。第一号は各地の同窓会会長や、私が「心の会員」と呼んでいる関心を寄せて下さる方々に歓迎していただき、「心の会員」の数は増える一方だった。米国とカナダの聖心会の学校で将来の同窓生を教育している学校長にも、ニュースレターを読んでいただくというすばらしい提案もあった。タイプライターに向かっている時間は多かったが、私がおの代わりに得たものも大きかった。

Mariana Ulloa de Baena のレポート

1. サンフランシスコ大会の評価（若い同窓生と共に）
2. 1985年の国際青年の年に向けて活動開始

サンフランシスコ大会で発足したプロジェクトについてニュースレターで説明

- a) 若い同窓生の交換
- b) ボランティア制度（シスター方のお手伝い）
- c) 報道班——写真の発送

3. 若い同窓生間の連絡

4. ユネスコの国際青年の年に関するアンケートに協力

5. 日本の大会のテーマの中から各地域に適したものを抽出、協力

欠席のお詫びと、過去8年間AMASCの仕事に協力して下さった方々に対する感謝、成功を祈る。

Maebh Lennan のレポート

1986年3月

AMASC顧問としての私の仕事は、ヨーロッパ各国間の連絡と、サンフランシスコ大会の際始めた仕事——年長の同窓生と若い同窓生の交流、同窓生と聖心会シスター方との交流を密にすること——を続けることだった。

サンフランシスコ大会の際、ヨーロッパ各国の会長は、大会の決議を実行するため協力することを決心した。即ちAMASC会員一人一人が精神的成長をとげること、聖心会との交流を計ること、各々の国で正義と平和のために働くことだった。そしてその基礎となるのは祈りだった。

世代間、国家間、AMASCと各同窓会の間、同窓生とシスター方との間のコミュニケーションの問題にまず取り組むことにした。そのために、ヨーロッパの会長会議を毎年開くこと、各国の集會に Bibiane と私が出席すること、ヨーロッパ各国の学校や青年団体を私が訪問することにした。

この結果、4年間の私の顧問在任期間中、得られた成果の中特筆すべきものについてここに報告する。

ヨーロッパ各国会長のAMASC定例会議

- 1982年9月 第一回会議。イタリアのミラノにて開催。AMASCの目的をより深く理解し、又相互理解を深めた。各人が精神的成長を目指すことを確認。
- 1983年 第二回会議。ベルギーのブルージュにて開催。会議の主題は正義と平和。各国があらゆるレベルでコミュニケーションをよくするよう努めることを確認。
- 1984年 第三回会議。スコットランドにて開催。多くのシスター方の参加を得た。東京大会への準備開始——ヨーロッパは何を貢献できるか。
- 1985年10月 第四回会議。スペインのバルマにて開催。国際コミュニケーションについて意見交換。

これらの集會は、いずれも朝・夕の祈りを共にすること、英仏西語はじめ全てのヨーロッパの言語でミサにあずかることによって非常に豊かなものとなった。

これらの集會は、英仏両言語で行われ、「共に働く」ことの喜びに満ちていた。主催国5ヶ国、各々の執行部、各国のシスター方、司祭達、そしてスコットランドでは司教に感謝したい。

シスター方との話し合い

この4年間、ヨーロッパ各地で同窓生、学校そして何よりもシスター方の支援を得られたことが収穫だった。シスター方に会い、様々な仕事を見せていただき、シスター方の世界各地での仕事に対する私自身の理解を深めることができた。私達は常にシスター方の祈りに支えられているということを再確認した。心から感謝している。

S. H. O. W.

18歳から24歳までの若い人達のための祈りと友情の黙想会。

1985 SHOW 1 参加者16名

1986 SHOW 2 参加者21名

来年は聖心会の経営する学校以外の学生も参加できるようもっていききたい。人生の意味を模索している若い人達に黙想の時を持ってほしい。将来のこと——正義と平和、祈りそして聖心会と協力していくこと——を考えてほしい。それはそのまま、サンフランシスコ大会が私達に与えた課題でもある。

AMASC 世界大会 (東京)

WUCWO (世界カトリック婦人連盟) AMASC 代表レポート

Sabine van der Plancke

WUCWOの活動は日本のいけ花にたとえられる。

いけ花の三要素は { 地
人
天

地は私達のおかれている現実。

AMASC加盟国 約40ヶ国

WUCWO加盟国 約62ヶ国

人は111団体に属する3,000万人の女性。団体は小規模ながら活動的なモーリシャスの家政学校から、米国・カナダの強力なCWLまでさまざまである。AMASCもその一つ。そしてAMASC会員も3,000万人の1人である。

天は我々の理想——新しい共同体を作っていくとす力と霊的生活。

花を一つにまとめるのは剣山。WUCWOにおいて剣山の役目をするのは次のものである。

・私達のねらい：婦人の貢献を進めること

・私達の5つの目標：教会及び世界における婦人の協力

現代の諸問題の研究

発展 (生涯教育を含む)

国連の諸団体への代表派遣

全員の一致、調和

代表者会議は、世界五地域から理事を選出。現在、理事会は

アフリカ	9名	} の理事から成りたっている
アジア太平洋地域	3名	
ラテン・アメリカ	1名	
北米	3名	
ヨーロッパ	6名	
国際団体代表	4名	

最後に、花は水を与えられ器にいけられる。私達にとって水とはキリスト教の信仰、器とはカトリック教会である。

更に、花を鑑賞する人々が居る。WUCWOは非政府非営利組織(NGO)として、ECOSOC, UNESCO, UNICEF, FAOの国連機関の会議を傍聴、またアメリカ州団体、ヨーロッパ会議も傍聴。

以上WUCWOの活動をお花にたとえて説明してみた。WUCWOへの協力をお願いする——ニューズレターの定期購読及び各同窓会が準会員としてWUCWOに参加するよう働きかけること。

OMAAEEC (世界カトリック学校卒業生の会) 代表

Carmen Romano de Marin

OMAAEECを見てきて気付いた二つの基本的事項。

1. 大きな国際機構において、非政府非営利組織の重要性が増してきていること。政府団体は余りにも政治的な動きをするので、現実を直視しているとは言えない。同窓生の責任は重い。AMASCの役割——各国の会長は、各々の国の他の団体の会長と連絡をとり、連合を組織し、国の政策決定に介入して欲しい。
2. 今日の国際機構における若い人々の役割は大きい。法的地位の確立が望まれる。今年の10月にマドリッドで開かれる次の集会の案内。

人権問題連絡係

Patricia Horsley

1978年に「人権問題連絡係」に任命されてからの私のモットーは、「まず義務を果たすこと。権利云々はそれからのこと」というものだった。

私の義務とは

1. 国連の「世界人権宣言」のもつキリスト教的価値感に基づいて各人が活動できるよう、既存の団体等に関する資料、情報をAMASCに提供すること。
2. 世界の聖心の置かれている状況に特に目を向け必要に応じてAMASCの注意を喚起すること。
3. AMASC内で、印刷物、個人的接触を通して人権問題を取り扱うこと。

1982年に小堀会長に再任命され、活動を続けた。その際に、レポートその他の資料を度々提供し、多くの反応があった。それらを全てまとめ、私自身が序文を書いたアルバムがあるので、会期中に目を通されたい。

各 国 会 長 報 告

オーストラリア聖心同窓会 (ASCA)

責任者 (1982—1986) クィーンズランド州ブリスベイン, スチュアートホルム同窓会会長

- ◎第一の目標は、まず国内に於て各同窓会間の連絡を密にすることで、そのためにニュースレター等を発行し、同窓会の集まりにできるだけASCAの代表が出席するようにした。
- ◎第二の目標は、国際的なもので、世界的な団体の一員であるという自覚を深めることだった。
 - 古切手の収集 (ポーランドとハンガリーの同窓生のこの大会への旅費のため)。
 - ウガンダで働く同窓生のシスターを資金面で援助
 - メキシコ、コロンビアの被災地への経済的援助
 - 外国の同窓生の家庭での受入れ体制の強化 (1985年には29人の日本の同窓生を受け入れた)
- ◎長年、寄宿学校だったケレバーパークがサンフランシスコで啓発された一同窓生の努力により、最近知恵遅れの若者のための施設に生まれ変わったことを付記しておく。

コロンビア (UNASC) 活動報告 (1982—1986)

- サンフランシスコ大会前は、大会へ向けて準備が続けられた。
- 各地で、様々なテーマで会議が開かれた。
- 会長による各同窓会の訪問 (1982年2月～3月)
- 会報「コサス・ヌエストラス」の発行。
- 資金集めのためのバザー、その他の行事を各地で開催。
- 初金曜日、黙想会、祈りの日等の実施。
- 平和と正義をテーマに全国大会開催、新会長選出。
- 会長サンフランシスコ大会出席、その後そのテーマの説明に、各地の同窓会を訪問。
- 世界同窓会長の訪問。
- 各同窓会会長会議、ラテンアメリカ大会を通して東京大会へ向けての準備開始。
- ネバドデルルイズ火山の被災者へのAMASC会員からの寄付金の取り扱い。

キューバ聖心同窓会——亡命地に於けるキューバ聖心同窓会の年間報告

1985年12月

亡命地に於けるキューバ聖心同窓会は、家族又は仕事の理由によって亡命した世界のあらゆる場所の加盟者により構成されている。その最も中心となるのはマイアミである。

この一年間の聖心会のいろいろな修道女方の訪問は、私達の御母の御心が私達の中に生き続け、私達が教育と未来の世代の育成の為に奉仕する様勇気づける助けとなった。コロンビアの**Madre Paulina Herrera**と現在マイアミに在住の多くの同窓生の先生が1月から2ヶ月にわたって訪問され、その御指導のもとに、同窓生は集会、祈りのグループ、聖なる時間、聖書指導、公会議文書の研究等を組織するために動員された。活動は全て大変熱心に続けられている。それぞれの同窓会が消息を知らせる会報を発行し、お互いが奉仕の中でどの様に発展するかの意見交換のために、常に私達の支えとなっている。8月にはイタリア・フローレンスの**Madre Canals**と**Madre Martinez**の訪問があった。又、祈りのグループの集まり、講話、聖なる時間等が多く作られ、そこで思い出とか計画を共に話し合った。又、精神的豊かさのための活動の中で、私達の助言者である**Angel Villaronga**神父による月例講話、ミサに続く「ヨハネ・パウロ2世黙想の家」の**Amando Llorente**神父により指導された2つの黙想会のことを付け加えなければならない。

母校の祝日と聖マグダレナ・ソフィアの祝日は、聖体讃美で記念された。今年マイアミでは、500人以上の同窓生が出席し、その席で、経済的に貧しい家庭に対して、或るカトリック大学より奨学金が送られる旨報告された。

老人ホーム及び病院訪問、クリスマス期間、母の日、聖バレンタインデーにおけるそれら老人ホームの為にパーティの企画が各同窓会から私共に届いている。「マイアミのユース・センター」では、若い人々が精神形成と向上の場を見出し、多くの同窓生と**Madre Margarita Miranda**が活発に働いた。**Madre C. Rosello**は、毎初金に集まり御聖体拝領で終わる特別の勉強グループの中でお互いが助け合うのを目的として、「聖心(みこころ)への真の信心」についての一つの講演をされた。

人権を守る為の委員会と、生命を守る為に戦う他の委員会の創設、又、ボゴタの聖心会の修道女方を通して届けられた、コロンビア地震被害者救援のための献金が行われた。各地から絶えず私共のもとに届く報告は満足のいくものである。各地でキューバ同窓生が既に個人又は組織化したグループとして、福音宣教の活動、又、慈善事業においてそれぞれの教会と協力している。

スタディ・グループからは、ボゴタにおけるラテン・アメリカ会長会議及びAMASC東京大会参加のためのテーマを準備するいろいろなアイデアが出された。

私達に望まれている「愛の文明」を押し進めるために聖霊が私達を導いて下さることをお祈りし希望している。

ハンガリー同窓会の報告(1982—1986)

◦日本同窓会に対する感謝(2人の代表の世界大会への出席を可能にしたこと)

◦ハンガリー同窓会の概要

会員180名は、ブダペストの二つの学校の卒業生だが、両校とも1949年に新政府によって閉鎖され、会員は世界各地に散らばっている。スイスのチューリッヒに本部をおき、毎年同窓会

を開催すると共に、年二回、会報を発行している。特にルーマニア国内の約200万人のハンガリー人を援助することに力を注いでいる。又、必要があれば、ハンガリー国内にも援助の手を差しのべたい。

◦活動報告(1983—1985)

- 1983年10月 チューリッヒにて同窓会。クリスマスまでにハンガリー、ルーマニアに17個の小包を送る
- 11月 フィリピンエム校(1948年閉鎖)百年祭、ハンガリー国内の同窓生300名、国外より5名出席
- 1984年6月 チューリッヒにて同窓会。国外に居る約200名の同窓生の名簿の改訂
- 10月 フィリピンエム校の1944年の卒業生の卒業40周年記念同窓会、オーストリアのライデンベルグの聖心にて開催。11名中5名出席
- 11月 チューリッヒにて同窓会。東京での理事会の報告及び東西交流の必要性の報告。ハンガリー、ルーマニアの支援を続けることを決定。小包9個ルーマニアへ発送
- 12月8日 ライデンベルグ(オーストリア)聖心にて、オーストリアの同窓生と共に、無原罪の御宿りの祝日を祝う
- 1985年3月 衣類、本、薬品、ミサ用祭服等を積んでハンガリーへルーマニア国内のハンガリー修院の聖堂補修の為送金
- 4月 小包4個、ルーマニアへ発送
- 6月 チューリッヒにて同窓会。一同窓生の日本での体験談を聞く。ロンドンにて英国在住者の同窓会。寄付を募る。(運営資金とルーマニア向け小包のため)

イタリア同窓会(UNIEASC)活動報告(1982—1985)

イタリア同窓会は常にシスター方と緊密に連絡をとり教えられてきた。

私達の目標は何か共同の活動をすることではなく、一人一人が自分の生活を省みて、自分の受けた教育をよりよく日々の活動に活かすこと、いわば生涯教育のすすめである。そのため、毎年、年頭にプログラムを提案する。

各同窓会は月に一度集まり、黙想、討論、ミサ、時にはバザーや昼食会、主として社会奉仕活動を行う。

次の様なプログラムが提案された。

1982—83 未来の教育

1983—84 教会の建設

1984—85 世代間の対話——異文化間コミュニケーションのテーマに沿って、特に日本の研究

C. E. I. のテーマ「キリスト教的調和と人間社会」の勉強

1985—86 第二回バチカン公会議及びC. E. I. 関係書類の研究

聖心会の精神の研究

一般信者の特別な役割

自分の中の調和, また他人との調和の研究

これらの研究の成果はまとめられ, 各同窓会を通してAMASC執行部とヨーロッパ顧問に送られた。

特別活動

1982—83 82年10月, ミラノにてヨーロッパ各国の会長会議

83年5月, ミラノにて聖体大会

83年9月, ジェノアにてイタリア同窓会総会

1983—84 テュラン聖心の百周年

ポローニヤ聖心の五十周年

Maebh Lennan の訪問

スコットランド, キルブラストンにてヨーロッパ各国の会長会議

ロンドンにてパデュアの若い会員の会議 (SHOW)

1984—85 ローマにて会長会議

Maebh Lennan, ローマ, パデュア, ヴェニスを訪問

85年9月, ローマにて総会

スペイン, マヨルカにてヨーロッパ各国会長会議

1984年10月, 1985年2月, 1985年5月の3回, ニュースレター「ヴィンコロ」を発行発送。

イタリア同窓生は世界各地で聖心同窓会を訪問している。皆さまもどうぞ。

日本聖心同窓会 (JASH) 活動報告 (1982—1986)

I. 日本聖心同窓会 (JASH)

1. 日本聖心同窓会は9つの同窓会から成っている。

・茂仁香会 (札幌聖心高等科)

・語学校・インターナショナルスクールアラムネ

・みこころ会 (東京聖心高等科)

・ドシエーン会 (不二聖心高等科)

・小林みこころ会 (小林聖心高等科)

・三光会 (専門学校)

・バラ会 (小林専攻科・短大)

・ソフィア会 (旧制専門学校1915—1948)

・宮代会 (大学)

2. JASHは次の理事から成っている

上記9つの同窓会代表と6人の役員 (会長, 副会長, 書記2名, 会計2名)

理事会は2ヶ月に1度開かれる。

II. JASH活動報告 (1982年4月～現在)

1. 第7回AMASC世界大会 (サンフランシスコ) にて小堀玲子がAMASC会長に就任。

1982年から1986年まで執行部が日本におかれる。

a. AMASC執行部を全面的に支援。(会長の外国訪問の旅費の援助等)

b. 1984年9月, 東京で開かれたAMASC理事会を支援。(昼食会, 夕食会を主催, 休憩時間の紅茶, コーヒーのサービス等)

c. 1982年12月に1986年3月に東京で開かれるAMASC世界大会の準備委員会の設立。約60名の同窓生が, テーマ, 運営, 資金の各面で積極的な活動を展開した。(資金は, 寄附と資金集めの活動——ビンゴ, コンサート, AMASCマーク入キーホルダー, ノート, シャープペンシル, タオル, Tシャツの販売——のために働いた)

2. 第7回世界大会 (サンフランシスコ) の課題「隣人との対話」を次の様に実践した。

a. ホスピタリティーの活動の強化——聖心関係の外国からのお客様にホームステイや観光案内のお世話, 1985年には特に多かった。

b. 1984年10月, 台湾旅行の企画。JASH会員が台湾聖心を訪問し, 台北の同窓生と親交を深めた。

c. 1985年7～8月, オーストラリアのAMASC顧問, Patricia Burns とオーストラリアの同窓生の尽力により若い同窓生29名がオーストラリアにホームステイの旅に参加。

d. JASH会長, 韓国聖心大学訪問。シスター方, 韓国同窓会会長及び先生方と会見。

3. 1986年の第8回AMASC大会のテーマ「異文化間のコミュニケーション」の研究のため, 勉強会を開いた。

a. 4年間に次のサブテーマのもとに9回の講演会を主催。

(1) キリスト教国と非キリスト教国におけるキリスト信者

(2) 異なる文化の中で暮らす人々

(3) 世代間の対話

b. 勉強会を度々主催。

c. 日本語及び英語で研究レポートを作成。

4. その他の活動

a. JASH理事とシスター方との話し合いの会開催。年一度, 管区長のJASH理事会への出席要請。

b. お年を召したシスター方のための茶話会を年数回実施。

c. 外国への援助。

- (1) メキシコ地震
- (2) コロンビアの火山爆発
- (3) 難民への経済的援助
- (4) エチオピアへ寄附
- (5) アムネスティ・インターナショナルへ寄附

d. 聖心会の学校の社会福祉活動に協力。

e. JASH活動の資金獲得のためのケーキ・セール（年間利益約25万円）。

f. 講演会

- (1) 安井神父様による月例講演会
- (2) 特別講演会

g. 同窓会の総会、バザー等で、AMASCやJASHの活動を報告、認識を広める。

メキシコ聖心同窓会 (EXASAC) の報告

1986年3月

メキシコでは、メキシコの会はEXASAC（卒業生と聖心会の友）と呼ばれています。会の主な目的は、カトリック精神のもとに今日の社会にあった、個人と会の発展を促進する事です。

その手段として

- 1) 会員の協力と団結を促進する
- 2) 生涯教育の推進と実践
- 3) 布教活動を広げる
- 4) 聖心会修道女との対話の促進

我々の目的と行動は、1982年カリフォルニア州サンフランシスコでのAMASC世界大会の決議文に基いています。その大会における他の決議文は現在計画中であり、まだ実行には移っていません。我々の仕事は、正義を守ろうと努力しています。何故なら、メキシコでは社会的不公平が横行しているからです。我々の国にある不公平を少しでも、やわらげるような社会活動をしています。

会の構成：メキシコでは1500名の登録された卒業生がありますが、600名がEXASACで活動しています。我々の問題は若い世代の不足であり、これはシスター達がかつと困っている人達の為に学校を閉鎖してしまわれたからです。その為、将来、会員の充実をはかるのが困難となっています。今日の世界で援助出来る若者を集める企画を作成する為の皆様の協力をお願いします。

皆様に我々の問題や不足している点、悩みや成果についてお知らせしようと思います。メキシコの会は600名の活動する卒業生に支えられています。彼女達の社会活動は重要で、メキシコ中に分散し、期待されています。その活動は次のようなものです。養老院、炊き出しの食堂、奨学

金制度の運営、指導書その他の出版物の編集、各種学校での教育指導、底辺のグループの手伝い、布教活動、読み書きの基礎教育などです。

私達は可能な限りで、AMASCのホスピタリティーの計画と、人権擁護にも協力したいと思います。

私達の執行部は5つの学校と、5つの支部と連絡をとり、同時にAMASCとの連絡を保っています。

この機会を利用して、AMASCに参加しているすべての国々が、さる1985年、多くの人命と、家や仕事も失う結果となった大地震の折に表わして下さった一致協力の精神に対して、感謝の意を表したいと思います。特に、玲子、日本、コロンビア、オーストラリア、英国、ベルギー、イタリア、スペイン、ハンガリー、アルゼンチン、西ドイツ、オーストリアに対して、非常な窮地におちいった我々を新たに立ち上がらせる為に、精神的、経済的援助をして下さった事に感謝します。AMASCが成しとげた事について、すべての言葉でお礼を申し上げます。

メキシコは歩き続けます。

メキシコは、聖マグダレナ・ソフィアが望まれたとおり、愛と奉仕に基いた仕事をする集団となるように、と心がけています。

スコットランド同窓会

通称、AASHScot と呼ばれるスコットランドの同窓会は小規模なもので、現在は一つの学校からしか新規の加入者がいないため、今後もそう大きくなることはないだろう。その上同窓生が各地に散らばっているため、まとまって活動することは出来ないが、各自が各々の地域のコミュニティを支援している。

但し、年に一度資金集めのための総会を開く。この資金はアイルランド及びスコットランドの経済的に困っている同窓生を援助するため、アイルランドの同窓生が運営している。各同窓会も様々な資金集めの活動を行ってこれに寄附している。

米国同窓会 (AASH) 1982—1986

Patricia Dickmann Sheehan 会長 (1985—1987) のレポート

この2年間の私達の最大の課題は、会員数の増加である。ベテラン組の献身的な働きに支えられつつ、若い同窓生の参加を求めて手を差し伸べている。AASHに加盟している40の同窓会は規模も、地理的条件も、必要としているものも様々である。強力な学校のある所もあれば、学校が閉鎖されてしまい同窓会だけが活動を続けている所、もともと学校のない地域に同窓会が作られた所もある。1986年秋には地域ごとの集会が開かれ、1987年4月8日—12日にはニューオーリンズでAASHの全国大会が開かれる。AMASCの皆様参加をお待ちしている。6万人の

同窓生の中、約5万人がコンピューターに登録されている。これらのファイルを常に新しくしておく為には経費がかかるし、専任の事務員も要る。ニュースレターも採算がとれる様再編成されるべきである。将来は同窓生に就職情報網システムを提供できるようにしたい。

AASHは、ひとりひとりのシスターとも、又聖心会ともよい相互理解の関係を保っている。

Lenore Thomas Stoddart 会長（1983—1985）のレポート

ボストン大会は新会長とその執行部に次のような指示を与えた。

- 1) 全国事務局を常設、適切なスタッフを配置すること。
- 2) 4つの地方大会からの提案を盛り込んだ新しい会則と細則を作成すること。
- 3) 1983年秋の実行委員会以前に、その4つの地方大会を開催すること。

これらの指示は全て、期限内に実行に移された。

- 1) 全国事務局はミズリー州セントルイス市に設置され、この2年間はセントルイス地区の同窓生のボランティアがスタッフとして働いている。
- 2) 新しい会則と細則は、シアトル大会で満場一致で可決された。
- 3) 地方大会は成功裡に終わった。

1985年のシアトル大会は、AASHの歴史に残る大きな変化をもたらした。大会が初めて会長の居住地以外の都市で開かれたのである。大会のテーマは「一つの心、一つの家族」だった。AMASC会長小堀玲子さんとそのスタッフの出席により、このテーマはより意義深いものとなった。シアトル大会は私達を鼓舞し、活気づけてくれた。出席者の数も記録破りだった。

Tony Walsh Curry 会長（1981—1983）のレポート

1982年4月にサンフランシスコで開かれたAMASC世界大会に出席、忘れられない6日間を過ごした。新しい友人はすぐに旧友の如くなり、聖心の家族の中には言語の壁もなかった。

聖心会の米国内の5つの管区が一つに統合された。各管区から選ばれていたAASHの代表も新しい地理的区分から選出されることになった。

1983年のAASH大会はマサチューセッツ州ボストンで開かれた。この大会は、又1933年にミズリー州セントルイスでAASHが結成されてから「50周年」の記念すべき大会だった。大会のテーマ「世界中で感じた心」は、AMASCの一員としてのAASHの立場を再確認するものだった。

以上 Patricia D. Sheehan, 1986年1月

オーストリア同窓会

4つの学校と4つの同窓会があり、年2、3回のニュースレターと年1回の通信「Cor Unum」によって相互の連絡を保っている。特に「Cor Unum」は、シスター方、学校、同窓生、生徒と

教師を結びつけるのに重要な役割を果たしている。

宗教教育——週末に黙想会を開いている。

生涯教育——1ヶ月に1度、主題を決めて勉強会を開いている。

若い人達——新たな若い人達のグループが作られ、盛んに活動している。

ホスピタリティ——オペラ交換留学等が盛んに行われている。

子供映画——同窓生がテレビ用に作成したフィルムがビデオ・テープとしても売り出されている。

ベルギー同窓会

ヨーロッパ各国会長会議の主催国として、「コミュニケーション」をテーマに一週間の訓練セミナーを開催、又「聖年」の一環として全国ワークショップを開催した。

レジャー委員会による美術館見学、友の会による病院訪問やブリッジ・トーナメント、月例委員会、ニュースレターの発行、小さい子供達とお母さん達のためのピクニック等が主な活動だった。

ジェットの学校の火事の際、聖マダレナ・ソフィアの教えのおかげで、私達は一致団結していることを痛感した。

カナダ同窓会

1849年創立のハリファックスの学校の中央校舎がまだ建っており、学校も生徒数380名で健全なことを誇りに思っている。

カナダ聖心同窓会（CASHA）は、今年誕生したばかり、広い国土に学校が散在しているため、全カナダを統一するのはなかなか大変だがAMASCの一員となれたことを喜んでいる。

キューバ同窓会

国外追放の身であるキューバ人は世界各地に散らばっているが、マイアミに最も多く住んでいる。老人ホーム訪問、月例通信の発行、祝日のミサや集会の開催などの活動を行っている。老人ホーム建設の計画もある。

英国同窓会

過去数年にわたって、組織の再編成を計ってきた。大多数の卒業生が全く無関心なため、従来の形でのNASHEは廃止し、個人加入の新しい形にした。この会がAMASCに会費を納め、

ヨーロッパ各国会長会議にも参加した。年会費は年二度のニューズレターと、会議の議事録のコピー代等にあってられている。聖心の巡礼の旅、黙想会などを毎年行っていきたい。

ホスピタリティーに関しては、余り成功したとは言えない。ヨーロッパ大陸の生徒と英国の生徒との交換を一度しただけである。オペラの需要が減ってきたし、下宿先を見つけるのも難しいが、国際集会は続けていくつもりである。但し夏に開いていたのを10月にしようかと検討している。(年度初めにロンドンに到着する生徒の役に立つため)

NASHEは、又、全国カトリック婦人会やWUCWOにも加盟している。

女性間の架け橋として、情報の伝達網として、援助、提案、ノウハウ、方法や経験のよき提供者でありたい。会則によれば、会の目的は、カトリック婦人の教会やその他のコミュニティーへの貢献を促進することにある。

フランス同窓会

最大の出来事は、23年間もフランス同窓会の会長を務めた Yannick Balay が引退したことだった。

4つの地方事務局と55の歓迎グループを結成。

他のカトリック学校同窓会と共に大きな会議の準備。

全国通信「カリタス」の発行。

各同窓会にホスピタリティーのグループ設置。

第三世界の国々の援助。(ポーランド、コロンビア、メキシコ、エジプト、チャド)

市民としての義務の自覚。

パリのラジオ・ノートルダムのラジオ番組に参加。

ヨーロッパ各国会長会議の一員として参加。

ドイツ同窓会

ドイツの同窓会は、カトリック婦人連盟、ドイツ婦人連盟に加盟した。これらの団体の中で、人工中絶、離婚等の問題に関して発言力を持っていきたい。

12の地方同窓会は定期的に会合を開き、2年前には全国大会も開催された。

バザーの収益は、アフリカ、エジプト等の聖心会に送られている。

学校はもう聖心会の所属ではなく、生徒達にも聖心の生徒であるという意識はない。これは、神学、文化、道徳に大きな変化をもたらした文化的危機のせいだが、若い人達は又、新しい正義、新しい愛に目覚めていくことだろう。

ドイツには、カトリックの団体が数多くあるため、AMASCも大変だが、同窓生はたいい何らかの組織で活躍している。

東と西の対話というのは、政治的に微妙な立場に居るドイツ人にとって、二重の意味を持っている。第二の意味の対話については、必要なのは言葉ではなく、祈りだと痛感している。

オランダ同窓会

会員数わずか300で、15年前に学校が閉鎖された為、これ以上会員が増すことも期待できないが、私達のスピリットは1960年代と変わらない。各地域毎に年4、5回集まっており、5年に1度聖心修道院で全体会を開いている。

同窓生とシスター方は個人的にも連絡を保ち、励まし合っている。同窓生の多くは、その地方の学校、教区、民間団体等で働き、重要な地位を占めている。これはその人達の受けたキリスト教教育の証しである。私達は目立たないけれども、世界聖心同窓会の一員であるという自覚を強く持っている。年2回発行している通信には必ずAMASCの活動の報告をのせている。

ニュージーランド同窓会

会員数1000、2つの支部と3つの関連団体から成っている。

ウェリントンの学校が閉鎖を余儀なくされたため、現在ニュージーランドには聖心会の学校は一つしかない。

今年の4月19日と20日に、初めての全国大会を開く予定である。

今迄、余り援助活動を行っていないがポリネシア人のために何かしなくてはならないと考えている。

オーストラリアとの交換学生制度が始められた。

ペルー同窓会

第三世界の国々の抱える人口増加や社会問題の増加に直面するにつけ、私達のような団体が積極的に社会福祉活動を行わなくてはならないことを痛感する。南米の中でも最も問題の多い国の一つ、ペルーの代表として、皆様に困っている人々の生活を少しでも改善するために、私達の国の経済、社会問題に対するより深い理解と国際協力をお願いしたい。

「異文化間の交流」研究及び グループディスカッションに関する報告

準備委員会テーマ委員

1983年の秋、準備委員会のテーマ委員は、第8回AMASC大会の統一テーマとして、「異文化間の交流」を取り上げ、本テーマを理事会理事、及び各国同窓会長に提案いたしました。同時に、このテーマの展開方法についてのご意見もお願いしました。

1984年9月に、本テーマの概略が理事会に提出され、下記の通り承認されました。

「異文化間の交流」

サブ・テーマ

I. キリスト教、及び非キリスト教的風土における信者達

教会——福音宣教

社会が保有する価値観

キリスト教系学校の役割——キリスト教的価値観の教育

教皇パウロ6世による福音宣教の見解と、日常生活の中での適用方法

それが現代社会の変動する価値観と相反する事はないか。

II. 本来の自分の文化圏とは異った文化圏で生活している人々

難民

外国人労働者

留学生

このような疎外された人々の状況に気づく事により、異文化間の交流を、より促進する事が出来る。

III. 世代間の対話

対話の為の共通基盤を求めて

高齢化社会への対応策

本草案は1984年12月に、各国同窓会長に送付されました。又、各国同窓会に大会用に印刷、配布する為、1985年11月末迄に、一つ、あるいはそれ以上のサブテーマについて論じたレポートの提出をお願いしました。更に、オーラル・プレゼンテーション（口頭発表）を希望する者は、事前に委員会に連絡するようお願いしました。

下記の18ヶ国から返答があり、それぞれ研究報告が送付されました。

アルゼンチン	キューバ	日本	オーストラリア	イギリス
メキシコ	ベルギー	フランス	ペルー	チリ
ドイツ	ポーランド	コロンビア	ハンガリー	スペイン

コスタ・リカ イタリア 北米

18の研究報告のコピーが、3部ずつ各国同窓会長に渡され、それらは同窓会員希望者の為に、再度コピーして配布される事になりました。

大会では次の方々が、発表を行なわれました。

中南米……Eva Leticia de Vallejo

オーストラリア……Sr. E. Moriarty

ベルギー……Françoise Wyseur

イギリス……Maria Milward

フランス……Christiane Bastard de Pere

ハンガリー……Klara Trispel-Hertelendy

日本……Ayako Ishizaka (石坂章子)

スペイン……Marise Fernandez Segade

さらに大会テーマに関して、次の三講演が行なわれました。教えられる事の多い講演に参加者は刺激され、活発な討論が続きました。

基調講演 緒方貞子博士

講演 浜尾文郎司教

グレゴリー・クラーク教授

グループディスカッションは、3ヶ国語で2セッション開催されました。参加者は選択テーマにより18のグループに分けられました。後に、これら実り多い討論の要旨は、コーディネーターと委員会により、各テーマごとに統合され、全体会に発表されました。

サブテーマⅠ Sabine van der Plancke

サブテーマⅡ Yasuko Abe (安倍泰子)

サブテーマⅢ Alicias Salinas

三講演

各国同窓会

ディスカッショングループ

以上の報告を、ここに掲載いたします。

AMASC 東京大会基調講演

上智大学教授

元 AMASC 顧問

緒方貞子

AMASC 会長、執行部の方々、又各国会長、再来日のシスター方、そして同窓生、友人の皆様へ。

本日、世界中の聖心同窓生が一同に会しました事は、まことに喜ばしい事であります。この数日間、皆様方は再会を楽しまれ、世界の各地、各国の同窓生を結束させる、この高雅な目標に向けて御奉仕なされ、又、大会行事、日程、活動などには慎重な検討を重ねていらっしゃるものと存じます。

まず最初に申し上げたい事、それはこの栄えある集りに講演の御依頼を受けた事で、これは私にとりましてこの上もない喜びでございます。私がこの名誉ある役目をお引き受けしたのは、私達が急速に変わり行く世界の持つ難問を共に直視しながら、私の考えや関心を皆様方と共に分ち合えれば、と願うからであります。この急速に変わり行く世界では、平和に仲良く暮らすことを学ばねばならないのですが、現実には余りにも苦しめられ、分裂しています。私は学習のテーマに、「異文化間のコミュニケーション」を選ばれた主催者に心から賛意を表します。皆様はこの課題が含む途方もなさについては、一応の理解、認識を持ってここにお集まりになったに違いありません。皆さんは、私達が文化的に多様なグループや人々の間で、コミュニケーションの達成が出来るとお考えになっての上の事でしょうから。人々を引き離すあらゆる相違点を克服する為にコミュニケーション自体は充分な物ではないにしても、コミュニケーションが人々に橋渡しの手がかりである事は疑いの余地もありません。

異文化間の交流なる問題に取り組む時に、第一にとるべき処置は我々が伝統、文化、願望に関して、多様な世界に住んでいるという事実を認識する事です。私には国連とのつき合いの中で、世界の到る所からやって来る人々を知る特典があります。国連の様々な討論の場で母国の代表として勤務していた間、この世界を構成している人々の中の相違点のみならず、実に大きな多様性を実感しました。国連には現在、159の加盟国があり、159の国家が権利を主張しています。人口10億以上の大きく人口密度の高い国もありますし、人口が10万に満たない小さな島や地方自治体もあります。国家という枠を越えた異なった民族同志の集まりや、それと同じく多くの宗教団体、言語団体があります。

生活程度という問題になると、豊かな北と、権利を奪われている南の人々との間には、実に大きな差が見られます。しかし南でも新しく工業化された国々は、急速な発展を遂げています。世界で、20ヶ国だけが一人当たりGNP \$ 2500を越えていて、40以上の国がGNP \$ 250 以下である

事を知った時、実に愕然と致しました。しかしGNPの示す数字が人間生活の中で持つ意味を悟った時、私は本当にゾッとさせられました。\$2500以上の豊かな国に住む人々の平均余命は70歳を越える一方、最も貧しい国々の平均余命は、かろうじて40歳に延びたところなのです。どこで生まれたか、という事が、あなたの生存や、清潔な水や、健康に関するケアや、雇用される事に影響を与える教育へのチャンス等の可能性を決定するのです。

私は地理的、社会的、経済的要素を引き合いに出して来ました。なぜなら、そのような物は文化として今日知られる物である人間の行動様式の特徴を長いことかかって形成するのに役立つという点では、人間の一生を左右してしまう程の物だからです。今日、ここにお集まりの方々にとりまして、今回は初めての訪日であり、又、初めて日本文化に接するという方も多いと思います。それで、私共の文化の特徴と、その国際関係とのつながりについて述べさせていただきます。

日本は古くからの島国であり、人口密度が高く、天然資源に乏しい国です。地理的には広大なアジア大陸のはずれにあり、文化の進んでいた隣国の中国や韓国の影響を濃密に受けています。しかし、島国である事の現実が、日本の安全と異質な独自性が保たれるのを可能にしました。何世紀もの間、日本は、日本独特の言語と文化を共有する社会を発展させて来ました。そのような自然的、歴史的背景から、日本人は勤勉という特徴を持つ労働様式を発展させました。

今日、かなり国際的に批判をされて来ている日本人の労働の気風について、少々問題にしてみたいと思います。乏しい自然環境は厳格な儒教的労働倫理と結びつき、人生哲学として労働にのみ込め込む考え方が日本人に生まれたのです。戦前の模範的な人物像は、二宮尊徳で、その像は日本中の公立小学校の校庭に建てられていました。彼は日本のベンジャミン・フランクリンと言ってもよく、早起きをして手伝いを済ませてから、山へたき木を取りに行く道々、その往復には必ず本を読みながら歩くという人でした。後日、彼は出世し、他人を助けてやれるような地位につきます。日本人の労働習慣は、日本人が敗戦と貧困から立ち上がろうとしていた戦後の日々に、一層強められました。経済復興と発展は、戦後の日本人にとって唯一の国民的目標になったのです。海外では、日本は日本株式会社などと受けとられています。日本の国民は実業と政府と政界の指導者が経済的実績を達成するために共謀していると言われていています。日本人は、しばしば経済的動物などといった汚名を着せられています。

日本の経済が西側の工業国の多くを圧倒し、日本の貿易が常に輸出過剰を示し始めた時に、日本とアメリカ、又は欧州との関係に、貿易摩擦が目立って来ました。エレクトロニクスから自動車、牛肉、オレンジに及ぶ一連の交渉が行われました。今日、日本はアメリカに対し、500億ドルの貿易黒字を抱え、その規模は世界貿易の内でも最も爆発的な問題点になっています。日本のワークホーリズム（働き中毒症）、貯蓄率の高さや複雑な流通機構には、激しい非難の声が浴びせられました。時として、これらの非難は、日本人には根拠のある批判というより、むしろ侮辱として受けとめられています。何故なら日本人は、一生懸命働く事に信念を持ち、その勤勉の賜物に大きな誇りを持つ傾向があるからです。日本人は、この伝統的な価値を多くの外国人が競い合えないという理由だけで、ゆずらねばならないのでしょうか。日本人は、それ程働かずに、又、

能率を落さねばならないのでしょうか。私は、今日、この摩擦問題は文化的なものであると思うのです。日本の場合は、多くのヨーロッパ諸国と違って文化の伝統があるので、文化の相違点が目立つ傾向があり、その為に激しい感情的な論争の対象になるのです。

異文化間の交流は、協力、協調の可能性の障害となるような国際間のある種の誤解を改善するのに大いに貢献するだろうと思います。けれども皆様方がどんなにお互いにわかり合っても、ある程度の行動が起こされなければ、私が述べているこの種の問題には、一致は生まれません。日本の経済界での行動に関しては、私は日本人が彼等の経済活動が国際的に密接な関係を持つ事を、もっと認識せねばならないという事を付け足させて頂きたいのです。たとえ勤勉がどんなに賞讃に値すべきものでも、もし彼等の勤勉の結果がすなわち工業製品が外国の市場になだれのように押し寄せ、人々を失業させるのであれば、日本人の国力を行動を新しい方向に向ける為に、何かが必要とされなければなりません。これらの問題への総合的な答えは御存知のように、日本の市場をもっと開放し、国内の需要を刺激することです。日本人にとって最も難しい事は、釣り合いのとれた全体としての相互扶助的国際経済システムの維持に彼等の行動がどんな影響を与えているかを認識する事なのです。

日本の聖心同窓生は異文化間の交流に於ける日本人の経験について立派なレポートを作成なさいました。このレポートは、日本はいかに異文化間の交流の中で、新参者として新しい取り組みに苦慮しているかを、はっきりと指摘しています。このレポートは、日本人以外の国民が日本で生活し、日本人と日常的なつき合いを始める時に会う文化の違いについて、実際に経験したデータを沢山載せています。日本はアメリカやヨーロッパが持つ移民や、季節労働者などの深刻な問題の制約を受けない事に、おそらく気が付かれるでしょう。しかし私達は在日韓国人の人権、居住の問題を対処せねばならないというように、少数民族の問題が無いというわけではありません。又、私達は難民として日本に定住しようと決めているインドシナの人達や、又、その数が増えている外国からの学生や研修生、そして仕事その他で日本に住んでいる外国人とのおつき合いも始めています。日本自身が更に国際的な社会に転じている今、日本人はより大きな国際的な舞台で、もっと積極的に交流する事を学ばねばなりません。

私は異文化間の交流が含む困難な点に、特に日本人が経験する問題について、ある期間直接対応に当たってきました。私は悲観的な見方はして来なかったつもりです。逆に、共通の目的をめざして働く為に人々を結集させる手段としてのコミュニケーション（交流）の役割に高い望みを抱いています。私達はよく、知識面や科学技術面の発見が進んでいるにもかかわらず、世界が何の進歩もしていないと嘆いたり、絶望したりします。たしかに戦争や対立も收拾がつかず、豊かさが進んでいるさなかに、何百万もの人が飢えています。人権侵害に対する保護手段が出来て来たにもかかわらず、拷問や正当な法的手続きをふまぬ即決処刑などが行われています。一体どこに進歩があるのでしょうか。人間は共存するすべを学んだというのでしょうか。

私が見聞する限りは、ここ数十年改善は見られて来ましたが、それは人間が共通の問題を解決し得たという事より、むしろ情報を分け合ったり、資源を活用させたり、協力し合ったりするよ

うになったという事でした。私が個人的にかかわって来た国際間で行われた活動のいくつかについて話させて下さい。難民援助の問題について考えてみましょう。今日、アフリカ、中東、アジア、中央アメリカには、1200万から1300万の難民や流民がおり、これらの人々は政治的、或いは経済的、或いは環境的な理由、又はこの三つが組み合わさった理由の為に、故国を離れざるを得なくなったのです。人間の大量国外退去は実に現代の特徴であります。この動向は追い立てられた人々にも、又、その人達から影響を受ける人々にも及んでいます。

1979年に私は、インドシナ難民調査団団長としてカンボジア難民に援助の手をさしのべる為に、タイへ行きました。その年、私はユニセフ理事会の議長をつとめており、カンボジア難民支援は、当然インドシナ難民援助活動に含まれていたわけです。難民問題に関しての私自身の体験から言えば、二、三の事を学んだという事です。その事について、今日皆さんにお話し出来るのは幸せだと思っています。第一に、この世界は善意の人々に充ち溢れているという事、悲劇的な事が起ると救援にかけつける人々がいるという事です。この事に関して私の調査団に委託される事になったカンボジア難民への最初の支援は、聖心同窓会により為された事。思い出し、嬉しく思います。この人道的な反応を誘発するのは、しばしばマスメディアであり、この事はコミュニケーションの重要性を示しています。例えば、エチオピア援助の場合、BBC放送のエチオピアドキュメンタリーが西側諸国の救援活動を惹き起こすのに役立った事は周知の事実です。一般の人々の反応は卒直で、自発的であり、たいてい決して食糧、薬、衣類などを送ってくれます。しかしながら、しばしば援助にからむ諸経費については、わかってもらえない事があります。すなわち、品物を送るには輸送料と、それを扱う人件費が要ります。緊急救急活動はボランティアの人達にしてもらえますが、緊急支援には、それを能率的な組織にしたいとすれば専門的な取り扱いが必要です。ところが物資を無料で送ってもらいたいと思っており、又、諸経費が含まれる事は善意に反するものだと考えている人々に、沢山出会いました。

輸送の問題は救急支援を開始する時の実に大事な要素であります。私は、1981年に初めてブノンペンに行った時の事を思い出します。小さな港を建設し、クレーンやトラックを持ち込み、飢えている人々の口に食物がちゃんと届くように、事前に道路を作らなければなりません。当時のカンボジアは完全に破壊されていました。最初の様々な段取りに加えて、小型トラックの修理工場を作る事からユニセフは始めなければならぬ事を知りました。トラックは地雷が仕掛けられてある恐ろしい道路の為、しっかり重装備され、その為、部品も積み込まれ、人々も修繕作業の訓練を受けねばなりません。タイやカンボジアで、これ程多くの献身的な人々が、あらゆる国からやって来て、政府やボランティア団体の代表として共通の人道的な目標の為に、しっかりと力を合わせているのを見て、実に報われた思いを致しました。

第二に学んだ事は、当初の支援を続けていく事の難しさです。殊に、緊急事態がしずまった後にも、一般の人々による支援を維持していく事の難しさです。支援発展グループ(支援を更に進展させていくグループ)は、緊急支援グループと区別されるべきです。しかし、今日難民の流出は、もっぱら発展途上国で生じ、貧困は人々の大量移動につきものであり、その為、難民自身は

かりでなく、その難民を受け入れる国の人々がこうむる救援の影響なるものに対して、外部から暫定的な手段が講じられるべきです。ある場面では、国際的な緊急支援そのものが、その国の人人を、彼等の居住している村から移転させるような事態を惹き起こす事になったのです。もし救援が、定住している人々の所にも届かずに、その外部の中心施設にのみ集中すると——もっとも、それは救援を送る側には簡単かつ実際の処置ではありますが——、定住している側にとっては彼等の故郷を失い、二度と帰れない事になるのです。私が経験した限りでは、カオイダンの難民キャンプに行く途中、こうして窮乏したタイの村落を通り過ぎて行ったのを覚えています。私が1981年に当地へ行った時に、そのキャンプは、しかるべく設営された村となり、菜園付きの前庭がある、きちんと屋根をふいた家々が建てられていました。キャンプの組織者による衛生設備拡張運動もうまく行き、難民達が清潔な家や設備が保証されると自覚した頃に、野菜栽培用の種も支給されました。このキャンプの光景は、難民の流入にひどく影響を受けたタイの村民の生活程度に比べると、ずっと高いものでありました。緊急支援活動以後の国際活動計画は、一時的な救援活動と密接に行われねばなりません。たとえ長期に亘る処置が国際的な共同体から得られにくいとしても、そのような計画作りがなされなければなりません。

この件に関して、ちょっとしたエピソードを紹介させて下さい。エチオピアの飢饉が広く知られるようになった時、ユニセフは日本に100万枚の毛布の呼びかけをしました。これは有名な日本人の俳優が音頭をとって全国的な運動になりました。その毛布の他に、輸送費の援助を求められました。この組織活動の結果、170万枚もの毛布が集まり、輸送用の資金も残高が出、その分は最近、アフリカの学生の奨学資金に廻されました。ここまでは、まあまあ順調なのです。この話は私達日本人の人道的な危機に対しての心の寛さを示しています。ところが私が母国のこの進んだ状態を、開発担当のオランダ人のある役人に話したところ、彼は彼の母国での呼びかけに対する複雑な反応に出会ったという事を話してくれました。一般からの問い合わせ電話の半数は批判的なもので、彼等によれば、この毛布を送るという一時的な処置は勧められないし、もし援助が必要ならば、他の長期開発活動と連携されるべきだという事でした。オランダ人というのは、この開発援助運動に関する限りは経験にとんだ考え方をするものです。というのは、彼等は第三世界に対して長期に亘る援助活動の傑出した記録を持っているのです。オランダの人々は緊急援助の落とし穴に気がついているのです。私はこの話に本当に感心したものでした。

私が知った三つ目の教訓というのは、国際的な難民援助の持つ政治的な深刻な面です。色々な難民のグループに差しのべられた支援の量が必ずしも公平に分けられていない事に気づいた方もいらっしゃるかもしれません。この差は救援の必要量とか、当時の物資の入手の可能性などによってもたらされたものではありません。一つのグループへの援助の額には政治的な考慮が影響を及ぼしているのです。インドシナ難民は、アフリカ難民グループよりずっと多くを受けています。又、インドシナ難民の間でも、タイのキャンプの難民は、国境にいる難民に比べてかなりの物を受け、又、彼等はカンボジア国内の難民よりも多くを受けています。カンボジア国内でのカンボジア被災民への緊急援助が一旦潮を引くと、「緊急援助活動以後に引き続いて行なわれるべき活動」

にとりかかれるような、西側諸国からの援助は殆んど無きに等しいのです。外的支援を阻止するのはカンボジアにおけるベトナム人の存在です。しかしながら、クメール人を助ける西側ボランティアグループがプノンペンにあります。プノンペンの近代的な小児病院を見て本当に報われた思いがしました。この病院は、私的なアメリカ人組織により援助され、若いテキサス出身の小児科医が経営しています。このボランティア機関の代表者は「政治的にこみ入った事柄は知りもしないし、気にもかけない。」と言っていました。しばしば奉仕的組織は政治的な障害物を取り除く事が出来ます。良きにつけ、悪きにつけ、政府は難民問題の解決には苦心していますが、難民は政治的な理由で政府から無視されている為に、より以上苦しめられたままにされる事もあるのです。

難民援助に含まれる努力は過去40年間に進展した国際的な共同活動の一つの、たしかな例でしょう。難民援助への国際的な共同体が存在していると言っても良いくらいです。しかし、だからと言って難民問題が解決されたり、解消されたりするわけではありません。この国際的な共同体の次の目標は、多くの人々が国外流出をしないように早めに勧告をし、流出を防ぐ為の協力などの方法を工夫する事です。私が属している国際人道問題独立委員会(The Independent Commission for International Humanitarian Issues)は、他の諸問題の中でも、この大変深刻な人道問題である難民の流出を早期に防ぐ手段を検討する事に的を絞っています。

難民援助への国際的な共同活動ほどには歴然としてはいませんが、人権保護の分野でもかなりの国際的な協力が推進されて来ています。私はAMASCが人権問題に関する活動に関係されていることを知っており、皆様方も国連や色々なボランティア組織が行った活動をよく御存知でしょう。私は過去4年間、国連人権委員会で政府代表を勤めてまいりました。国連はこの分野において、法律文書(legal documents)を備え、発布する事などの基準を整える事から、その履行、即ち調査による人権侵害を監視し、個人、又は政府によらない組織からの情報に従って行動を起こす迄の措置を講じています。人権がその国の国内的司法権の範囲にとどまる内政的な事柄だと見なされていた時代はもう過ぎたのです。国際人権規約、人種差別に対する条約、婦人差別に対する条約等、これらの条約には加盟国に属する個人が侵害されたとして訴えた苦情を処理する委員会を設立する旨の履行条項が記載されています。しかし法律文書の採択や、組織的な監督にもかかわらず、人権侵害は世界の到る所で行われています。この事から、政府に依存していない協同グループの活動が、いかに貴重な物かお分かりでしょう。彼等は組織的に支援を必要とする人に援助を与え、又、侵害の存在を公けにしています。

皆様方に注目して頂く価値のある活動、それは人権擁護の範囲を政治的、市民的権利に限らず、もっと拡げていく事でありましょう。特に発展途上国の多くは、経済的、社会的権利の伸長に大きな関心を持っています。二、三年前、国連の中で、このセットとなっている二つの権利の優先権の問題について、かなりの対立がありました。西側諸国は従来の政治的、市民的権利の助長を主張し、一方、発展途上国は経済的、社会的権利が向上しない限りは、政治的、市民的権利は確立されないと、反論しました。日本での私達の経験は、このセットされた二つの権利が互いに関

連し合っている事を示すように思えます。高度な教育水準と健康への配慮が維持されている社会的環境では、国民はより大きな政治的な責任を負うように思われます。しかし私は、基本的な教育の改善や、初歩的な健康への配慮が行き届いている事が必ずしも自由主義的な政治形態を生じせしむる物ではないという事実も認めざるを得ません。

私がここで述べた国際的協力活動の全てに於て、分ち合いの姿勢を保ち、共同作業に着手する点では、世界中から集った人々が、かなりの進歩を示しました。私にとり、より身近な人権問題の分野を引き合いに出しましたが、国際通貨の安定、安全輸送、環境保護などの多くの活動分野でも国際間の協力が実証されています。私達のこの時代を、同じ目的を持った者が協力しつつ頑張り、又、その活動のロケット発射台としての国際的共同体を作る試みがなされている、そのような時代だと見なす事、それはただの希望的観測ではないだろうと思います。

今日、皆様はある種の共同の仕事始める為に、マリアンホールに集まっておられます。世界中から1000人もの卒業生が出席なさるという事は、聖心会の創立者、そしてこの大学の創立者が正に夢にも思わなかった事でありましょう。世界中から女性が時間とお金をやりくりして数日間、東京に来る事が出来たという事実、一日足らずの内にここに飛行機で来られるという高速輸送システムを利用出来たという事実、又、近代的同時通訳の活用により、じかにコミュニケーション出来るという事実、このような世の中の好転が過去にあり得なかった規模での交流と協力を可能にしたのです。聖心同窓生の連合的な心意気がより良い、より人間的な世界の建設に重要な影響を与える事が可能であり、又、そうすべきであると思います。私は皆様方の行く手に待ちかまえている仕事に、是非、挑戦して頂きたいと思います。御清聴有難うございました。

「非キリスト教社会, 又, キリスト教社会 におけるキリスト者」

ステファノ

浜尾 文郎 司教

本日, この第8回AMASC東京大会においてお話し出来ますことは, 大変光栄です。又, 世界各国からの参加者がおられる事は, とても喜ばしい事です。皆様, ようこそ日本にいらっしゃいました。

このたび私の乏しい経験から, 非キリスト教社会, そしてキリスト教社会におけるキリスト者とカトリックについて私の考えと将来への希望をお話ししたいと思います。

21世紀に向けてキリスト教がどのように発展していったらよいか, これは日本のみならず, 全世界の問題です。5年前, 教皇ヨハネ・パウロ2世が来日された時, 日本の司教達と会見の場もたれました。その時, 教皇様は先進諸国の中でキリスト教文化を持っていないのは日本だけであり, 教皇にとっても, 世界の教会にとっても, このような日本の環境でキリスト教がどのように伸びてゆくのか関心があるものだと言われました。

ヨーロッパ, 北米, ロシアでのキリスト教文化は常に大変強力なものでした。これらの国々は, カトリックにせよ, プロテスタントにせよ, キリスト教的文化の遺産を背負っています。70年代半ば頃から, 日本, 韓国, 台湾は, アジアにおける先進国の仲間入りをしました。韓国でのキリスト教の影響は強まっていて, 今では180万人のカトリック教徒がいます。これにプロテスタントを加えると1000万人以上となり, 全人口の約25パーセントにあたります。朝鮮半島が南北に分割されている為, 韓国には, 共産主義への脅威, 政権の政治的圧迫などがあり, 緊迫感が非常にあります。言論の自由も制限され, このような状況において, キリスト教会は唯一の救いになっています。さらに, キリスト教会による社会への貢献度は非常に大きなものがあります。カトリック, プロテスタントを問わず, キリスト教が民衆の味方, 救いになっています。

このような韓国の状況に比べ, 日本では緊張もなく, ひいては人々がキリスト教会に余り期待していない, という状態です。したがって問題は, 日本の教会が社会の中で期待される所に充分答える事が出来るか, 又, カトリック教徒数40万, プロテスタントと合わせても, キリスト教徒が全人口の1パーセントに満たぬこの日本において, 非キリスト教的価値観のただ中で, 福音の価値に従ったまま, 十分に生きていけるかどうか, という事にあります。

1984年に, 日本司教団は, 「日本のカトリック教会の基本方針と優先課題」を発表して, その中で次の事を強調しました。「司祭, 修道者, カテキスタでなくても, 洗礼を受けたすべての信徒は, 信仰の喜びを誰にでも伝える者となるべきである。又, カトリック教会の全員が, 「小さな人々」と共に全ての人を大切にす社会と文化に変革する担い手になる。」人に「信仰の喜び」

を伝えるという事は、信徒が家庭で、職場で、学校で、地域社会で、もっと開放された人間になれるという挑戦です。さらに、非キリスト教的社会に福音をもたらす、その中の「小さな兄弟たち」(マタイ25章40, 45)や、差別され、疎外された人々を救う事は、日本のカトリック教会への大きな挑戦でしょう。私共、日本のカトリック教会は、まだ「小さな兄弟たち」に奉仕し、協力してゆく事に、あまり慣れていないのです。日本では、一人暮らしの老人、障害者、アジア人、アフリカ人、特に在日韓国人などは、全く差別され、非人道的扱いを受けているのです。

○世界における教会

ご存知の通り、1962年から65年の間、カトリック教会では、大きな刷新運動がおこりました。この期間中、世界中から、およそ3000人の司教が秋の二ヶ月程にわたって集まり、いくつかの問題について討議しました。これはカトリック教会にとって今世紀最大の運動となりました。それ以後は、世界中の司教が定期的に集まる事は、実際問題として不可能である為、シノドスという世界中の司教の代表者達の集まりが、三年毎に開かれています。

現在、世界の人口は、およそ45億人で、その内カトリック教徒は、7億人を数えます。カトリックは信者数の最も多い世界最大の宗教なのです。今世紀初めには、カトリック教徒の7割は、ヨーロッパ、北米、カナダにいましたが、今では7割が、アフリカ、アジア、南米にいます。

○1983年のシノドス

1983年のシノドスに、私は日本代表団の一員として参加しました。その時、司教達の殆どはアフリカ、アジア、南米からの参加者でした。この時のテーマは、「教会の和解と償いの使命」でした。

和解とは、神と人間と自然との和解、そして教会はその為に何が出来るか、何をすべきか、という事です。そのシノドスの前に司教達全員に用紙が配られ、各国の教会で討議されました。これに基づいて、司教達は自分の意見を提出し、これがシノドスでの簡潔な報告の背景となりました。これは非常に興味深いものでした。償いについては主に、神との和解の問題とされました。罪を犯した時、神に許しを得るだけでは充分ではなく、償いをしなければなりません。従って教会での告解という問題も重要なテーマとなりました。ヨーロッパの司教は、神との和解を主にとりあげ、罪と告解の問題について発言しました。実際、ヨーロッパでは罪の意識が非常に低下してきています。現代の世俗化した時代では神の概念が薄くなってきており、告解をする人の数も大きく減っています。従って、ヨーロッパの司教達は、この現象にいかに取り組むかに深い関心をいただいています。

しかし、フィリピンを除いてキリスト教徒の数が少ないアジアでは、主な問題は、人との和解でした。社会が分割されているアジア諸国の大きな問題は、「分割された社会における教会の役割は何か」という事です。例えば、中国本土と台湾、又、南北朝鮮における悲しむべき状態です。そしてインドには、カーストという問題があり、女性への差別があります。マレーシアや、インドネシアには、イスラム教徒との問題、タイや台湾では仏教徒との問題があります。フィリピンと韓国には人権や言論の自由への侵害があり、和解とはそもそも正義と人権の尊重にあるのです

から、難しい問題になっています。日本は「平和」という問題をとりあげました。日本は唯一の被爆国であり、核兵器による悲惨さを経験した唯一の国であるからで、日本にとって和解とは、世界平和の回復にあるのです。従って日本のカトリック教会は、和解は平和の推進にあると考えています。日本のカトリック教徒は少数ではありますが、教皇様と一緒に核兵器反対を強く求め、核兵器の所持、及び使用は決して真の平和をもたらす事ではないと主張し、これはシノドスの出席者にも高く評価されました。

アフリカの司教は、特殊な社会問題をあげました。日本にはカトリック教徒150人につき一人の司祭がいますが、アフリカでは司祭は一万人の信者を導かなければなりません。このような状況では、個人的に告解を聞くという通常の方法は不可能です。さらに異部族間の紛争があり、教会がどうすれば和解をもたらせるかという問題が起きてきます。結婚制度としての一夫多妻も又、アフリカの問題の一つです。

二千年の伝統を持つヨーロッパでは、その伝統を維持する事に主に関心を持っています。人々がしばしば告解に来るような規律をいかに保つかという問題を提起しました。しかし、アジアやアフリカの非キリスト教的国家では、教会の「存在意義」の方が重要であり、どのように福音を伝えていくかという問題の方に敏感になっています。

ラテンアメリカでは、フィリピンと同じく人口の9割はカトリック教会に属していて、支配者と被支配者にも、そして搾取する者にも、搾取される者にも、カトリック信者がいる事になり、教会内における分裂が問題となります。このような社会にどうやって福音をもたらすかは、大変重要な問題です。ラテンアメリカの司教の一人は、社会で権力を持つとすることは、罪深い選択になると強調していました。「宣教」という言葉は、過去に発展途上国にあっては、開発というイメージを持っていて、今日でも程度の差こそあれ、同じ状態です。宣教師と開発に従事している人とは多少似ています。宣教師がヨーロッパから派遣されて、学校、病院などを建てて宣教していくという発想は、まだ一般的なものです。宣教に関わるもう一つの特徴は掟の強調です。教会の掟を守る事は大変大切ですが、人々を救う事は更に大切だと思います。宣教が兄弟愛よりも掟を守る事ばかりであると、教会は生命力を失い、若者達が去って行く結果となります。

キリスト教的文化を持つヨーロッパを見ると、位階制度は二千年のキリスト教会の歴史と伝統を継続させる事を望み、この歴史と伝統を守る事が目標になっています。又、教義に関しては保守的で、掟の維持に関心を持っていく事になります。これは勿論、司教や年配の世代の関心という事です。若者や、殆どどの年配者達は、他の事に関心を持っていません。掟の強調よりも、彼等は教会の伝統的な考え方や掟に疑いを持っているようです。関心は専ら、社会をどうやってキリストの考え方に改めていくかにあります。この現象は、ヨーロッパだけでなく、カナダや米国のような、いわゆるキリスト教国家にも見られます。しかし前にも述べた通り、アジア、アフリカの非キリスト教国家には、社会問題に関する問題が大きいのです。教会がいかにして存続するか、社会の要求にどう答えられるか、非キリスト教国ですら、時に同じようなギャップが宣教師の考え方と、現地の司祭、修道者、信者との間にあるようです。しかし、そうであってもヨーロッパ

が私達の唯一の教師では最早ないし、ヨーロッパの教会がリーダーシップを取る時代は終わるといふ事は、どんどん明らかになって来ています。ラテンアメリカ、アジア、アフリカの教会が、まだ若くて、ヨーロッパ教会から学ぶべき事柄が多くあるとしても、全教会に新しい精神をもたらす事が出来るのです。

○福音宣教

現在では、日本とヨーロッパの新しい考え方の共通点は、宣教という事より、人々のものの見方の変化が重要であるとする所にあります。今までは、教会の掟を教える事が大切にされて来ましたが、今では教会の使命は、人々の考え方をキリストの福音的考え方に変えていく所にあると思います。この変化が福音宣教です。これは「回心」と呼ばれる転向です。福音書には次の言葉があります。「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ1章15)ここで改心というのは私達に罪があるからだけでなく、心を変えるという意味です。考え方を変えるという事です。聖書にもう一つ、「新しい葡萄酒を古い皮袋に入れる人はいない。そうすれば葡萄酒は皮袋をさき、葡萄酒も皮袋も無駄になる。」とあります。新しい葡萄酒はイエズス様の教えを象徴し、その恩恵を秘蹟と祈りで得る事を意味します。これがみな古い袋に入れられたら、葡萄酒はこぼれてしまいます。私達は新しい皮袋に変わらなければなりません。これが回心です。たとえその考え方が罪でなくとも、福音に反するような考え方は、全て変えるという事が第一のステップなのです。それがキリストの教えの真髄であり、私達が目標にせねばならない事です。日本だけでなく、世界中の教会の使命は、信者の数を増やす事や、掟を守らせる事ではなく、人々の考え方を換え、生活のスタイルを変えて、キリストによる考え方やスタイルに近づける事にあると私は確信しています。

○カトリック学校の問題

日本のカトリックの学校の問題もここにあるといえます。本当の意味でのキリスト教的教育をしているのか、それとも次の目標の実践だけで満足しているのか。

1. 行儀の良い生徒を作る
1. 悪い態度を受け入れない
1. 生徒を名門校に入れる為に準備させ、エリートを作る

私個人は、学校がカトリックであるからといって学業や行儀という理由から、生徒を受け入れないという事は良くないと思います。生徒が入学許可を得た以上、卒業するまで世話をすべきです。しかし現在そうではありません。日本では、キリスト教的背景がなく、だからこそ教会は一般的な考え方や、世論と違っていても福音を教えるべきです。

日本の教会は自由を得て、およそ百年になります。その間に第二次大戦を経験し、それ以後は特に自由になりました。この過程で、カトリック教会は教育や福祉を通して社会に大いに貢献して来ました。宣教師、司祭、信者の努力は日本でいかにして市民権を得るかという事でした。カトリック学校も日本の社会の為になる生徒を教育してきました。それによってカトリックの市民権を獲得する事が布教の第一歩であるというのが先輩達の考えの中心にありました。キリスト教

の教育を受けた生徒は、社会に喜んで受け入れられます。しかし、これからは皆、社会における福音に反する態度や優先問題を変えるよう努力すべきです。つまり、日本の社会の改革者にならなければなりません。カトリック学校が、現在このような人々を育てなければ、もはや日本に存在する意味はないと思います。聖書には、又、「もし体の一つの部分が苦しめば、すべての部分も一緒に苦しみ、もし一つの部分がほめたたえられれば、すべての部分も一緒に喜ぶ。」(コリント前12章26)と、あります。このように感じる事は、キリスト教的になるという事です。現在、世界の人口の3分の1の人達が一日三食出来ませんが、残りの人々は出来ません。三食出来る人も、他の全ての人々が出来るようになってから初めて喜ぶべきです。しかし、今ではそうではなく、そうする事が求められていると思います。これは現在日本の生徒達の心に、大いに要求される連帯感です。現在の日本の教育制度では心身共に健康な子供だけが普通の学校に行けます。カトリック学校の大多数も、この方針に従っています。しかしカトリック学校こそ障害を持つ子供達を受け入れてほしいものです(身体に障害を持つ者のみ)。1978年にカルカタでマザーテレサにお会いした時、マザーテレサは、一番惨めなのは、生まれた時からいらぬと思われている人々です、とおっしゃいました。これ以上の惨めさは決してありません。勿論日本では状況が違いますが、誰にもいらぬと思われている人々がここにもいないと言えるでしょうか。私は日本で実際にいると思います。それは前に述べた「小さな兄弟」である障害者です。特殊施設などに入れられては、いつも殆んどの人々は大変違った見方で接しています。昨春、障害を持つ一人の生徒がカトリック学校に入学出来ました。問題もあったのですが、先生達も生徒達も、この少年を受け入れました。ところが、親達の態度はとても冷ややかなものでした。その理由は、学校はそういった生徒を受け入れてもいいが、自分達の子供と同じクラスでは良くない。それは先生が特別に注意するから、その分自分達の子供に注意がいき届かなくなるからというのです。この親達にとって、障害を持つ子供は、まさにいらぬ人です。こう考えてみると、いらぬ人とは誰でしょう。聖パウロは、コリント人への前書の中でこう言っています。「目は手に向って『おまえはいらぬ』と言えず、頭は足に向って『おまえはいらぬ』とも言えない。それどころか、体の内で最も弱くみえる部分は、むしろずっと必要である。体の内で他よりも見栄えがしないと思われる部分をおおって、より一層見栄えがするようにします。」

○難民——もう一つの望まれない部分

日本政府は、東南アジアからの難民を受け入れ、国有地に宿舎を建てる代わりに、いろいろな宗教団体に頼ってきました。日本人も土地を貸すのを嫌がり、土地の品位が下がるので、仮宿舎を建てる事に反対しました。教会が土地を貸す事に同意しても、近くの住民が、そのような施設を建てる事に反対したのです。この人々にとって障害者と難民は、マザーテレサの言われた「いらぬ人々」だったのでした。

○在日アジア人に対する日本人の態度

日本人は西洋人には寛大ですが、他のアジア人には冷たいのです。しかし、日本は文化的にも地理的にも、アジアの一部です。他の国々に受け入れられる為には、この事を忘れてはなりま

せん。従って日本の教会もアジアの隣人達とのつながりを強めなくてはなりません。十年程前、タイのチェンマイの大学の指導者達の集まりがありました。多くの社会問題が取り上げられましたが、半数の人が日本企業の進出と、日本人観光客の高圧的な態度が、アジア諸国の大学生が抗わねばならない社会問題であると述べていました。最終日の後、参加者の一人が「日本は戦争に負けて、困難な時代を経てきたが、勤勉さによって立派に立ち直った。しかし私は日本人が好きになれない。日本人は他人の為に決して損をしないからだ。」と言いました。これを聞いて私は大きなショックを受けました。東南アジアの人々は、日本から多くの援助を受けていますが、彼等は日本も利益をあげており、こういった利益が得られなければ、決して援助はしない、と考えています。キリスト教の愛とは、他人に良い物を提供して自分が痛むから愛なのです。マザーテレサが日本に来た時、「今必要なのは痛む愛なのです。」と、さかんに言いました。痛まない愛、親切、時間、不必要な物を与えるのは愛ではないのです。献金の額によって、その人を評価するのではないのです。日本人は能率的に、又、省エネルギーで他人に親切にしようとしています。これは美德ではなく、単なる生活の知恵です。自分達さえ良ければそれで良い、他の人々が同じように出来ないのは、こちらのせいではない、と。日本には、日本が損をしても他の国の人々を助けねばならないと考える政治家はいません。真の国際化とは、自国の為だけでなく、他の人々の為につくすように働く所にあるのです。

○連 帯

ある会議で、オーストラリア人の司祭が太平洋の魚には限りがある。日本人だけがその魚を食べ、他の人々は獲る事が出来ないと知っているか、日本人が魚を食べるのを少し我慢したらどうか、と言いました。日本の漁業は他のアジア諸国に比べ、大変発達していますし、日本のやり方は他の人々が自分の分を獲れないようにしています。水、空気、魚などは、天然資源であって人類全体の物です。漁法がすぐれているからと言って、すべてを獲って良いとは言えません。更に、この魚を外国に出かけて行って売るに至っては、更に恥すべき事です。日本人は、太平洋の魚を独占すべきではありません。ある程度さしみを食べるのを我慢したとしても、太平洋沿岸の他の国の人々が魚を食べられるように考える発想を持たなければなりません。先進国としての日本が、痛む愛とはどういう事か、そして痛みが分かるとは、どういう事かを考える事が大切だと思います。このメッセージをひろめる事こそ教会の使命です。それが日本人の心を変え、日本をアジアの仲間とし、全人類のメンバーとする事につながると思います。これこそ日本の教会と学校の目的なのです。その為には、日本が損をしても良いと考える国になれば、希望が持てるというものです。

○平 和

世界平和は、世界の若者の最も関心のある所で、東西問題よりもむしろ南北問題に関心を持っています。国家主義といった片寄った見方からではなく、全人類にわたるグローバルな見方で問題を取り上げる傾向がある事は喜ばしい事です。宇宙船地球号という見方も、地球と人類全体の為の資源という関心の一つのサインです。こういった考え方が自然破壊への警告と環境保存運動

の起点です。国際ボランティア運動も素晴らしく賞賛すべき物です。しかし、同時にこれほどの情報や相互関係があるにもかかわらず、国家や民族間に問題があるという事に注目されます。この国家間、東と西、南と北の対立は、国家主義の行き過ぎに根を発するのではないのでしょうか。21世紀における教会の挑戦とは、この民族中心主義に打ち勝つ事ではないのでしょうか。キリスト教国であれ、非キリスト教国であれ、これはヨーロッパ、アジア、又、全世界の病いと言えないのでしょうか。聖パウロのエフェソ人への手紙からの一節によって、私の話を終えたいと思います。「キリスト御自身こそ、私達の平和であり、お互い離れていた二つの物を一つにした方です。キリストは、ご自分の体によって人を隔てていた壁、すなわち敵意を取りのぞき、数々の規定を伴う掟から成る律法を無効にし、二つの物をご自分に結びつける事によって、一人の『新しい人』に造りあげ、平和を実現しました。すなわち、キリストは十字架によってお互いに離れていた二つの物を一つの体とし、神と和解させて下さいました。……ですから、あなた方はもはや異国の人も、よその人でもありません。聖なる人々と同じ国籍の人であり、神の家の者です。」(エフェソ2章14, 19)

御清聴ありがとうございました。

講

演

上智大学教授

グレゴリー・クラーク

私は今日、ここに出席させて頂けた事を殊の外、喜ばしく思っています。と申しますのは、今日ここで話すように御依頼を受けたテーマは、「異文化間の対話と接触」であります。大人になってからの殆んどを、長期にわたる中国滞在、ソ連、そして現在日本という、まさに「外国」で過しました私には、とても胸に迫るテーマなのです。

又、更に喜ばしく思っておりますのは、女性の方々の前で話すようにとの御依頼を受けた事があります。何故なら私は、女性こそ実に、この分野に於ての究極的な指導者であると思うからです。男性が国家や一般の人々の間に作ってしまった壁を打ち破る為には、女性に頼らなければなりませんでしょう。

私はここで実際に体験した事をお話ししましょう。外国で暮し、特に外交官として働き、又、様々な国々の夫婦に出会った事の中から、幾度となく同じような事を見聞しました。まず、ある国から人がやって来ます。彼の会社とか政府は彼を養成するのに多額のお金を投じているのです。彼は毎日仕事の上で異なった社会に住む人達と絶えず交際をするのですが、それでも彼の理解力は時として、かなり浅い事があり、時には非友好的、もしくは敵意を持ったりするのです。が一方女性は、この場合は、その男の妻にあたる女性の事ですが、彼女は夫が受けたような恩恵にも浴さずに、それ以上の理解力を示し、又、特にその異国の言語をもっとしっかり身につけてしまうのです。

私がこの事を申し上げるのは、私にとって言語という物が、とても重要な物だからなのです。異文化間の交流には三つの側面があります。その三つの側面に、次のような簡単な見出しをつけてみました。1. 知的、2. 実際の、3. 情緒的、などです。知的な側面というのは、異なった社会の本質を理解する事で、この事については、日本特有の背景という点で後述致します。実際の側面というのは、別な社会との関わりをどういうふうにつかつかという事、即ち異国での旅行、クラブ活動、交友、及び勤務などです。交換学生は、その大切な例の一つです。日本にはオーストラリア人の学生は、本当に僅かしかいません。彼等は、16歳か17歳の時に来日し、一年間滞在します。日豪関係の分野に於て言葉を濁さず申しますと、最も活動的で効果的な役目を果たしているのは、このような人達なのです。政府や企業は年輩の人々を養成するのに多額の費用を投じていますが、それは効果もなく、年齢的にも遅いのです。若い人達は心が柔軟な時に来日します。彼等は言葉を大人より上手に学ばばかりか、殆んどの大人達には出来ないようなやり方で、偏見にとらわれません。さて次に思い切った形での異文化間の交流の主な物として国際結婚がありますが、私は目下、その方面で実験中です。

私にとりまして仕事上の生活で一番の喜びは、二人の子供を、この日本で二つの文化の間で育てている事です。この事は今迄して来た何のものにも増して深い満足感を与えてくれます。これは異文化間の交流の実際的な側面です。しかし主な分野は、私が情緒的な面と呼んでいる姿勢、感じ方の問題にあります。よその国へ行って、そこの人達とつき合いなさいと他人に言うのはたやすい事です。では、それをどのように行ったら良いのでしょうか。人間として私達は自分自身と他の人々との間に壁を感じとってしまいます。この壁を簡単に打ち破る方法はありません。私達は、そういうふう生まれついているのです。そして実際に、本能的にこの壁を感じる事は必要な事だとも言われています。日本を見て御覧なさい。あらゆる点で、とてもうまく行っている社会ではありませんか。日本人は日本の外ばかりでなく、日本人同士の間でもとてもグループ意識が強いのです。この強いグループへの帰属感というのが、日本が成功している理由の一つでもあります。

それ故、私達は皆人間であり、ある程度まで、これらの壁が私達の本性の一部であり、又、私達の本性の欠くべからざる部分であるという考え方を受け入れなければなりません。しかし、もし他の国の人々を理解し、彼等と生活を共にし、一緒に働く時には、私達はその壁を何とかしなければなりません。どうやって、それを越えたらいいのでしょうか。私の場合、たった一つ確かな方法があって、それは謙遜な姿勢をとる事です。私は不幸にして生まれつき謙遜な人間ではないので、この点でとても苦労しました。しかし、そうするのにとても簡単で便利な方法を発見したのです。他の国民が、あなたが持っている何ものかを持っていると、単に信じ込むのです。すると発展途上国の人々にさえも、あなた方の国民が持っている良い点が見えて来ます。そして、その事に目を向けて次のように言ってごらんください。「その秘訣を知りたいのです。この人達は何故その優れた特質を持っているのでしょうか……。」と。

日本に来ると驚嘆すべき面が実に沢山あります。もちろん批判されるべき多くの面もあり、その事の二、三については、浜尾司教が述べておられますが、それ以上に我々西洋の人間がこれから心がける必要のある事や、今見なられている多くの面があるからです。それは謙遜な姿勢を育てていくのを助けます。しかし、もっと便利で、もっと実際的な方法で謙遜さをかち取る方法があるのです。それは「言葉」です。ここで私の好きなテーマに話を移しましょう。

あなた方が日本や中国に来ると、あなたはひどく無学文盲なのです。自分でどんなに伶俐だと思っても、その国の言葉が話す事が出来ません。どんなに小さい子供よりも愚かなのです。謙遜しない事には、どうにもならないのです。日本には一億二千万以上の人がおられ、彼等は私が持っていない、おそらくこれからは持たないだろうと思われる能力を持っています。そんなわけで、ごく自然に初めから私は日本の人々を尊敬しなければならないという次第です。この点に関して女性が私達に教えてくれる事が沢山あります。

どういうわけか、女性の方が男性よりも、言葉を覚えるのが上手です。この事は、しばしば証明されて来ましたが。門外漢として見ていると、あなた方女性をこのようにさせるのは、女性は何でも受け入れ易く、けんか腰な所が無いからです。女性が受け身になりすぎると批判する人もい

ます。時として、そういう事もありますが、言葉という問題になると、受け身という事が絶対的な長所となります。あなた方が自分の価値を他人に押しつけようとしない事、そして只、受け入れられる事、これが絶対的な長所なのです。

男性として、私は何もかも教科書から学べるのだと思いついて、とりかかりました。それは知的な面では、それで良かったのでした。と言うのは、沢山の教科書を読んで勉強すれば、いつかはその問題に関する限りは身につける事が出来るでしょう。私はこのやり方を知的入門法と呼んでいます。三年かかって私は中国語をものにしようと思戦苦闘しましたが、その結果、私は中国語に負けてしまいました。そこで私は息抜きをしました。そうせざるを得なかったからです。私は二、三の中国人の友人を見つけました。すると突然、驚くべき事がおこりました。ただ受け入れる態度をとるだけで、目よりむしろ耳を使う事によって、その言葉が頭の中に流れこんで来たのです。その後、すぐ数年間、ソ連へ出かけましたが、ここでも同じテクニックを用いました。が、運悪く、ソ連では仕事やその他の事の為に息抜きする事が出来ませんでした。が、それでもなお、ソ連の人々を尊敬するのは難しくはありませんでした。彼等には、私達が持っていない良い点があり、それは更に私に彼等の言葉を身につけようとする気持をおこさせてくれました。

しかし日本で私は最高の経験をしました。言葉について私の得た経験をお伝えすれば、それはあなた方のお役に立つでしょう。私はまずテープレコーダーを買いました。日本人は素晴らしいテープレコーダーを作っていますが、言葉を習うのに、それを役立ててはいません。日本人は先生と呼ばれる「教師」を使うのです。これ等のあやしげな教師は、その英語をどこで身につけたか私は知りませんが、全く理解しにくく、教え方も下手なのです。テープレコーダーと呼ばれる簡単な器具はずっと効果的で、ずっと安くつきます。黙って欲しい時には黙りますし、しゃべって欲しい時にはしゃべってくれます。

日本人は、この素晴らしい機械を発明しましたが、それを使っていません。彼等は世界中に輸出し、貿易摩擦を起こしました。実際、テープレコーダーが発明されると外国では大部分の語学教師が必要とされなくなりました。言語は聞きたい事に耳を傾けながら自分自身でこそ身につけるべきものであります。

私が日本に来た時、天気予報だけを録音しました。他の事はせずに、ただ二ヶ月間、毎朝天気予報だけを聞いていました。初めの内は何も分かりませんでした。これは決まりきったお知らせなのだ確信し、このお知らせは、とても大切な情報で、もしそれが分からないと私は濡れたり、風邪をひく事になる。それで私は一時間かけて、それを何度も繰り返し聞いて解読したものです。

言語を習うのはとても面白い事です。私達の脳は二つの部分からなり、いわゆる意識と意識下からなっています。子供達はある点では大人達より有利だと言われています。彼等は言語を身につけるのに脳の意識的な部分を使わず、意識下の部分を使うのです。一般には右半球とか、左半球と言っていますが、私はオーストラリアから来たので右、左というよりも北、南と言いかえたいと思います。子供達は南半球にあたる部分がすぐれています。その部分は脳の最高の部分で

す。言語は脳のその部分に属しています。言語はコンピューターのような物であり、そのコンピューターは、あなたが生まれた瞬間から脳の中に置かれていて入力されるのを待っており、その入力操作は目を通してはされないのです。それは耳から入力されます。皆さんは、どんな語学の教師よりも、ずっと多くの経験をお持ちです。皆さんが、お子さんをお持ちだという限りでは、世界で最高の語学教師なのです。あなた方の子供達はお国の言葉を完全に話しておられますね。彼等はどこで、それを身につけたのでしょうか。彼等はあなた方から習ったのです。教科書からではありません。耳から、それもあなた方が気がつかない内に、あなた方の言葉を身につけたのです。あなた方の言葉は自動的に脳の中に引き込まれ、そのコンピューターの中で自動的に蓄積されて、分類されました。そのコンピューター、それ自体は文法上の複雑なもの全てをこなし、教科書は必要とされませんでした。あなた方は子供達に文法を教えなければならなかったでしょうか。いいえ、その必要はなかったのです。私達は皆、その驚くべきコンピューターを脳の中に持っているのです。残念ながら私達のほとんどは、子供の頃にそれをただ使うだけでした。そして大人になった時、目から習おうとします。私達は北半球の部分を使おうとしますが、素晴らしいコンピューターを作る事は出来ません。お粗末な物しか作れません。それは小さくて、あなた方が目から学ぶが為に、しばしば間違っ て入力されてしまいます。あなた方は目から発音を身につける事は出来ず、目を通して抑揚を身につける事も出来ません。

どの言語でも歌のような抑揚があるものです。あなた方が歌を習う時には、それを楽符から習いますか、それとも耳から習いますか。勿論、耳からです。言語は歌のようなもので、それは耳でのみ学習されるものなのです。

しかし私が「意識的」なコンピューターと呼ぶものについてのもっと大きな問題は、遅い事にあります。南半球（右脳）の意識下のコンピューターは電気のように作動します。が、北半球（左脳）には電力がありません。それは手動によって作動します。信じ難い程、遅いのです。ゆっくりとなら読む事が出来るし、おそらく書くのもそうです。それは時には話す事さえ出来、口の動きと連動する事もあります。しかし、とりわけ日本におけるその北半球の脳を持つ最大の欠点は、聴きとれないという事なのです。

私は日本人の学生を教えています。彼等は長い間私をだましていたのです。彼等は私の英語をわかっているようなふりをしていたのです。最近、私は彼等が一言も理解していなかったという事に気がきました。そして彼等のそういう理由というのは、私が早くしゃべりすぎるという事でした。問題は、この北半球のコンピューターなのです。それは、あまりにもゆっくりと作動するのです。言語を習うには、それをそこから取り払って南（右）半球の部分に、そのコンピューターを移動させなければならないのです。

大人である私達でさえも、意識下のコンピューターを維持しています。私達はそのコンピューターが100%作動していなくても、それを持っています。それは特に私の場合、少々さびついています。しかしそうだとしても、まだそのコンピューターはそこにあるのです。もし私が暗号解読のテクニックと呼んでいるものを使えば、そのコンピューターが、ごく自然に作動するように

なるのです。そのテクニックというのは、聴きたい物に耳を傾け、それを解読しようと試み、その挑戦を理解し、その解読出来た事に満足を覚える……という事です。

日本の女性が内気で引っ込み思案で、おとなしいと言われていますが、それは殆んど真実ではありません。彼等は T.V. 放送に出て身の上相談なる番組で自分自身の事や、悩み事について何でも話してしまいます。そして男性にとって、それがとても不思議な事なのです。

さて、人がどうやって異文化を理解するかという問題にもどりましょう。異文化間の理解について私達は、あまりにも表面的な事にとらわれすぎているように思います。文化には二つの次元があります。一つは禅とか生け花とか空手、俳句、歌舞伎のようなものです。このようなものは、とても魅力的ですが、やはり表面的であり、この分野では、とても惑わされ易いものです。例えば、私は中国経由で日本へやって来たのですが、日本の文化の基本は中国から由来しているのです。日本人は基本的には中国人と同じだろうと思っていました。ところが私の考えは間違っていました。日本人は基本的な性質という点で、全く違っています。仏教や儒教といった日本の宗教や、多くの哲学、多くの言語、文学なども中国から伝わって来ましたが、日本人の基本的な姿勢は全く違っています。

聖心で学んだ皆様方は、聖心で同一の教育を受け、その教育は皆様方に共通のものを与えています。中国人と日本人と韓国人とヴェトナム人には又、共通なものがあります。それは中国文化を知っているという事です。しかし皆様方が聖心に入られた時、ある人は外向的、ある人は内向的、又、活発な方、おとなしい方と色々だったと思います。たとえ皆様方が同じ教育を受けても、基本的な性格には変わりありません。同じ事が日本にも言えます。日本人は中国人のようなものだと思われています。しかし性質が違っています。中国人は実に西洋的な人柄だという事に気がつきます。私は彼等に「合理主義的」という言葉を用いてみたいと思います。私達西洋人は自分達が論理的であり、主義とか理性とか思想に基づいて解決すると考えたがります。しかし議論、討論、主義、そして論理という事になると中国人は私達西洋人を簡単に負かしてしまうのです。

中国人は非常に合理的な国民です。彼等が合理主義をうまく使っている時に、私には素晴らしく見えます。その合理主義が少々取捨がつかなくなる事も、たまにはありますが、彼等は基本的には私達西洋人の持つ合理主義的、個人主義的な方向に属しています。各々個人は自分の独自の意見を持ち、それを喜んで発表するのです。ところが一方日本人は全く違って、合理主義的ではありません。彼等は主義を主張せず、時として主義よりも感情や実際の現実の方をより大切にしたりします。彼等はこの事を実に率直に認めています。西洋人をびっくりさせる「たてまえ」と「ほんね」という価値基準は中国人を更にびっくりさせています。日本人は個人主義的ではありません。彼等はずっと集団志向です。さて、日本人の特質という根本的な問題にもどって見ます。

日本人の国民性とは何でしょう。私は日本人の特質について述べて来ました。まだ沢山ありますが、その一つとして有名な社会学者の中根千恵女史によれば、日本は縦社会であります。中根

氏は日本の「ヒエアルヒー」について問題をしばっています。またこれも現存しているのです。又、他の人は日本人の法律を余り尊重しない傾向に的をしばっています。日本人は非思想主義的とも言われます。罪の意識よりも恥の意識が強く、何か悪い事をした時に罪を犯したのではなく、人前で己れの恥をさらしたとされます。更にこの事は有名な学者であるルース・ベネディクト女史の「菊と刀」の中で述べられています。

日本人は人間関係を非常に重んじます。彼等は御都合主義であり徹底的ではなく、他国の文化を受け入れても、他国民は受け入れず……と浜尾司教は述べています。私達は日本の持つ矛盾を感じてしまいます。日本人は自分達が和を好む国民だと自認しています。がその事は私がJALに乗って来日した時に聞かされて来た事でした。ところが成田空港で降りた時、空港をとりまく警官を見て驚いてしまいました。で、私は友人に尋ねました。「ここであの警官は何をしているのですか。」「過激派学生をしめ出そうとしているんです。」「学生達は何をしようとしているのですか。」「彼等は空港を破壊しようとしているのですよ。」「どれ位の間そうして来たのですか。」「六年間です。」「和の精神はどこへ行ってしまったのでしょうか。」「と、私は申しました。

時々日本人は非常に和の精神を欠きますが、時には協調性をとり戻します。時として彼等はものすごく働いたかと思うと、怠けたりします。私の所の学生の例をお話ししましょう。多分面白いでしょう。

こういった事すべてに見られるのは、あまり重要ではない特質のいくつかです。私達は一つの特質について二、三の些細な面にのみ気をとられ、「本当にその通りだ。」などと言ったりします。日本について説明するならば、魚について講義をする為に日本と一緒にやって来た学者の話をしてみたいと思います。ある一人の優秀な科学者がおまして、彼がこう言いました。「魚が他の動物と違う理由は、「えら」という独特な呼吸のしくみがあるからですよ。」と。すると他の循環器の専門家が言いました。「いいや、魚には尾が有って足が無いというのが、その理由ですよ。」と。恐るべき議論が続きました。すると、これをずっと聞いていた人が言いました。「そのような事は、あまり重要ではない違いですよ。基本的な違いは魚が水の中に生きているという事です。その結果、しっぽや、えらや、その他の物があるのですよ。他の動物は地上で空気を吸って生活しているのですから。」と。

日本についても同様な事です。環境が全く違うという事です。私は思うに、日本の環境は他の国民に比べて、ずっと「直感的」ではないでしょうか。

日本人は自分達について「村意識」を持っていると言っています。私はもっとさかのぼって、「家族の」すなわち家族的タイプと名付けたいのです。するとここでは本当に同じレベルの言葉をお話する事になるわけです。

あなた方が家族の中でどのように振舞うか考えてごらん下さい。あなた方は家族というグループと、個人と、どちらを重要視しますか。あなたは無意識に家族というグループの方を取ります。その家族の中には、ある上下関係があり、それは自然で直感的です。日本も同様です。あなた方には家族の間に感情的な甘えがありますね。日本についても全く同じ事が言えます。あな

た方は法律に依存しますか。もしお子さんが悪い事したら、あなたは弁護士を呼びますか？ 警察を呼びますか？ そんな事はせずに自分達で何とかし、「罪」よりもむしろ「恥」を用います。その子は家族というグループの前で、彼自身を恥じ入らせる事をしてしまったのですから。ますます日本的だと思いませんか。私達は日本人の他の色々な性質を実際の経験から調べる事が出来ますが、基本的にはいつも同じ所に戻っていきます。それは「家族的」という事です。

この「家族的」なアプローチは、村やクラブ活動の中にもあります。フットボールチームの男達が感情的な行動をとるのを見た事がありますか。日本人とまるで同じなのです。私達は皆、この本性を備えています。しかし他の文化を持つ国々では、もっと理性的なアプローチがそれに代わります。法律、議論、討論、イデオロギーなどのものが本来備わっているものの上に置かれています。

日本人は、この本来備わっている物を洗練させ、発展させ、家族間以外にも使っています。その点は何ゆえに日本がこんなに興味深いかという理由であります。彼等は企業の中で、会社の中で、又、政治の中でそれを行っており、更に国家がらみで、それを行っているのです。この民族は一億二千万の日本家族なのです。さて、こういった事を行っている過程においても、あきらかに歪みが見られます。度が過ぎている点もあります。浜尾司教はその幾つかについて述べています。自分達の社会の中においてさえも部外者を受け入れたがらない日本人の排他性とか、身障者に対する本能的嫌悪とか……などです。これも又、我々が家族の中で行動するやり方であるわけです。もしあなた方のお子さんが病気になると、あなたは心配します。でも隣りの子供が病気をしても心配しますか。心配しませんね。これはお隣りさんの問題なのです。さて家族レベルの事なら、これで良いのですが、勿論国家レベルとなると一寸問題があります。国家はその国境の外でどんな事が起っているか考えざるを得ません。しかし、私は日本人的アプローチの良し悪しに判断を示したいとは思いません。私が言いたい事は、日本人に本来備わっている特質が国家レベル、あるいは企業レベルでも正しく利用され得るという事です。この事は私達外国人にしてみれば、非常に興味深い事であり、大切な事なのだ、という事です。

私達は西洋とか、日本以外の世界で理性的なアプローチをしています。それにはそれなりの良さがあります。私達は日本人よりもっと科学的な、体系的なアプローチをします。私達西洋人ばかりでなく、中国人や印度人は純粋で理論的な科学の分野では強味を発揮します。しかし応用には弱いのです。日本人は物事を行ったり、改良したりするといった単純で実際的な分野では私達より優れています。文化とか国民性のもとになっているようなものには、まあ言ってみれば「二元性」なるものがあるのです。

このような事は、すべて殆んど完璧と言えるまでに男性と女性の特性の二元性を反映しているのではないのでしょうか。女性はより洗練された直感力を持っており、男性はその論理性、絶対的感覚を持っています。彼は彼なりの強味を持っていますが、非常な弱味も持っています。それは独断的で、外部の考えや文化を受けつけないという性質です。ある科学者達が取り沙汰している事に、実にびったりするような、こうした日本人の特性と一致します。女性は感じやすく、その

直感力は実際的で状況に合わせる柔軟性を持つ日本人の特質と同じに強い特質となっています。彼等は、彼等がかくあるべき、というよりはむしろ、あるがままに事態に順応します。そして最も重要な事には、人間関係にはこの女性的な特質の方が優先されます。私達男性が人間の特性の持つ女性的な面から多く学びとるのと同様に、非日本人社会にいる私達は日本の本能的なアプローチに学ぶ事が沢山あるのです。

本当にあった事をお話しして、この講演をしめくくりましょう。目下、日本人は、いわゆる国際化するものに関心を寄せています。彼等は窮屈で小さな集団に、あまりにも長いこと所属していたので、外の世界に心を開いて行く必要があるのだと実感しています。そうしなければ、アメリカ人が貿易その他の諸問題で日本人を更にきびしく批判する事になるだろうと思っているのです。それゆえ自己の利益という点から、日本人はアメリカ人がどのように思っているのか知ろうと努めています。そんなわけで日本のT. V. 放送では、カットされていないアメリカのT. V. 番組が沢山見られます。それは「60 Minutes」という番組で20分間のインタビューが三組でなっています。60分間全部日本語に吹きかえられて日本のT. V. で放映されました。英語、即ち米語を音声多重放送で聴く事も出来ました。スタインブレナーという男がインタビューされていました。その男は野球チームのオーナーで、なかなか攻撃的な人物です。彼は自分の人生哲学を述べており、人を雇い、又、情容赦もなく解雇すると話していました。勿論日本では、このような事は全く受け入れられない事です。正当な理由がなければ解雇するわけにはいかないからです。

ともかく彼はインタビューを受け、その最後に彼の人生観を手短かに述べてほしいと言われました。彼はその人生観は簡単なものだと言いました。“Nice guys finish last”と。これはとても理性的で攻撃的な男性的なアプローチです。すると日本人の通訳には、その意味が全く分からなかったのです。言葉は、とても簡単なのですが、通訳者には言葉の背後にある考え方が分からなかったようでした。日本では、nice guy は、常に名誉や尊敬を受ける人の事です。（日本はある意味では、実に穏やかで処置など厳しくない社会ですから）そこで通訳者は、この言葉を「良い男は最後まで頑張る」という意味だと決めつけました。私は、それ（日本人の考え方）をととても立派な人生哲学だと思えます。

各国よりのレポート要約

テーマ 1：キリスト教国、又は非キリスト教国におけるキリスト者

スペイン

スペインは長いカトリック宣教の歴史を持った国であり、その自覚の上により深く深いカトリシズムを考えている。1) 伝統的なキリスト教国においてキリスト者はまずキリスト者である事は真に人間であるという事を知らねばならない。キリストは人間として生まれ完全な人間であられた。人間であるという事とキリスト者である事は同義である。そして真の人間性の実現は到達する時がない無限の追求として、人間に課せられている。人間性の本当の実現は神に於て初めて可能である。2) 人間性の実現は、何よりも愛によって可能である。愛とは自分の持つもののすべてを、更に自分の存在のすべてを与えつくす事であるが、その為にはまず自分自身であらねばならない。神に質問をくりかえし、自分自身に光をあて愛を行動に移す事が福音宣教である。3) 非キリスト教国の文化を西欧とは異なったキリストへの道として尊敬すべきである。キリストの実現は人間性のあらゆる可能性を通じて行われる。あらゆる文化は、人間性の発現である限りにおいて神のものであり、神への信仰のない者は、人間を信じない者である。4) 従って現代社会の価値観はキリスト教の価値観と矛盾するものではあり得ない。完全な人間性の探求の為に信じて愛する事が我々に要求されている。

ドイツ

ドイツでは価値観の変化と多様性が著しく物質主義に対抗するカトリック教育の充実が望まれる。ドイツは経済的には繁栄しているが若い人々は権利を主張するのに熱心な半面、老人や子供への思いやりに欠けている。又、科学や技術の進歩への信頼が最近失われつつあり、将来への展望ももてないまま、酒や麻薬におぼれるなどせつな的な快楽を追求する若者も多い。こうした状況において、キリスト教にもとづいた人格形成を目的とする教育が必要である。その為には、論理的思考を子供が身につけられる様、論理と哲学の教育の充実が望まれる。

フランス

フランスでは、キリスト者と無神論者が大半を占めている。我々は互いに会話を持ち共通点を見出していかなければならない。互いに信じ理解をして、女性の役割は夫と子供にメッセージを与える事にある。現代社会は信仰の喪失、物質主義、マルキシズムの挑戦など福音宣教を困難にする要素が多い。そのなかで教育が文化と信仰、他人との相互理解、教会への信仰を教える人間性を互いの内に認める努力——本当の愛の実践と天なる父との会話こそが大切である。それは祈りに外ならない。

コスタリカ

第一のテーマについて次の質問を設定しアンケート調査を行った。対象者は26名である。

- コスタリカではキリスト教的環境の中に生きていますか。
- どういう点がキリスト教的であると思いますか。或はその反対。

調査の結果、多数が形式的、表面的且つ法律的にのみコスタリカはキリスト教的であるが、本当の意味では多くの非キリスト教的傾向が見られるという意見を発表した。

キリスト教的性格

1. コスタリカではカトリックは憲法に定められた国家の公的宗教である。
2. 宗教、教会及び人間性の神聖さに対する尊敬の念がある。
3. ミサ聖祭への参加、聖地巡礼、祝日の行列等は非常にポピュラーで参加者も多い。
4. ヨハネス23世のソーシャルスクールを通じ、教会が公私の機関の改革を推進している。
5. 近年、使徒的運動及び精神的刷新運動がブームである。

非キリスト教的性格

1. 離婚、利己主義、性の解放による、家族崩壊の急増。
2. 公私の機関に見られる一般的な腐敗。
3. 消費主義及び物質主義の増加。
4. ボルノ、上品に欠けるアトラクション、ファッションに対する黙認。
5. 反神論の侵入。

チリ

キリスト者は、皆、使徒として福音の教えを世に広める使命をもっている。第二ヴァチカン公会議後20年を経て我々はもう一度我々の使命を自覚しなおし、本当に福音の使徒とならなければならない。我々の時間と労力と熱意をキリストの為におしみなく捧げ、互いに兄弟姉妹として、希望と喜びの内に歩かなければならない。福音宣教は現代の家族、職場、国家、更に国際社会においてその基本的な問題の答をキリストの人格の内に見出す事である。かつてキリストの使徒がローマ、ギリシャそしてヘブライの文化をキリストのみ心をもって統一したように現代の多様な文化はキリストの内の一つである。我々はそのためのパン種であり、世の光であり、地の塩である。

ミッションスクールの役割

第二ヴァチカン公会議は教育の目的について、『調和のとれた人格』の完成、責任感と努力する態度の育成、自分の自由を自分でコントロールして、人生の最終的目的にむかって生きた信仰をつちかい、人間を自らに似せて創られた神の愛に答えなければならない。又、ヨハネパウロ2世はカトリック教育は聖書の精神は一般的な文化と共に伝えられるべきであり、それには学校教育と共に家庭の教育の役割が大きいと語られた。我々は子女の教育において常にキリストを念頭におきその教えに従わねばならない。

福音宣教

福音を伝える為にヨハネ・パウロ2世は世界を旅された。彼はキリストからの『よき知らせ』をあらゆる国、町、村に伝える為に巡礼を実行されたのである。それを範として我々は孤独な人、助けを必要としている人、心を病む人々に手をさしのべ勇気を持ってキリストを通して人間が神との関係を回復できるよう働かなければならない。

メキシコ

メキシコはスペインにより植民され、16Cにキリスト教が伝えられた。多くの波乱の歴史があったにせよ、キリスト教会はメキシコの建国と近代化に多大の貢献を成しメキシコ人の心に信仰を深く植えつけた。宣教師たちの社会事業や教育組織への貢献ははかりしれないものがある。

現在のメキシコはインフレに悩み物価の値上りは著しく失業者が増大している。一般国民の生活は貧しいが他方、人口の15%に相当する経済上の特権階級があり貧富の格差が著しい。政治はそれらの人々の手にあり、一般の人々は教育水準が低く政治的関心が薄く、彼等の代表者を政治に関与させる事ができぬままである。行政的な組織がうまく行かない為に成果が上がっていない。文盲者が1000万人から1200万人残っている。私達はこうした欠乏が周囲にあり、高等教育をうける特権に恵まれた者として、社会に貢献する義務がある事を自覚しているが、実際に何をすべきか解らないでいる。一般に聖心の卒業生は社会のエリート層にあるが、その階層には次のような特長が見受けられる。1) 『より多くのものを所有したい』という消費主義、金銭主義 2) 家庭の価値の低下：カトリック的家庭観は退化し『権力、富、性を崇拜の的に変化させようとする者の犠牲の状態になって来ている』（プエブラ 57—3）富と権力のない者への蔑視。メキシコは伝統によってのみキリスト教徒であり、現実には非キリスト教的な社会である。レポーターはそうした社会は自分達が社会的、政治的責任をなごりにした為であったと反省している。社会のエリートたる環境にある者が福音の教えどおりに生きる事はむづかしい。しかしメキシコでも中産階級が台頭しつつあり、彼等と共に神の国の為団結して働く事を新たな目的としたカトリック教徒のグループが生まれており、神の援助の元に信仰の回復と自己の生活のキリスト教化に進んでいけると希望をもっている。

コロンビア

今日の環境に於て、キリスト教徒である事は隣人の中にキリストを見ることである。

コロンビアの社会はキリスト教社会であり、伝統的にキリスト教の影響を強く受けてきた。しかし、最近では、家庭問題、飢え、貧困、幼児の死亡率激増等、深刻な危機に直面している。これは快楽主義、消費物質主義等、資本主義の悪い一面が現出している為である。これにより、人権軽視、侵害がすすんでいる。キリスト教徒である我々は同胞と団結し、この窮状を救わねばならない。

他方、時代の進展とともに異なった価値観が生じている。精神主義と物質主義、社会より個人、

目的の為に手段を選ばず、善より悪に走る傾向、会話や理解より力づくで解決する、等があげられる。これ等の事実は非キリスト教的風潮であり、このような中でキリスト教徒の任務は困難をきわめる。

カトリック教会は西洋社会における教育分野に重要な役割をはたしたが昨今の社会の変化によりカトリックの教育理念に基く学校運営にも危機が到来している。聖職者及び教育に従事する聖職者の激減、性との倫理、宗教等よりの離反などが見られる。あらゆる教育理論、方法を試行し、キリスト教教育特有の教育方針を放棄する事も考えられる。

ペルー

ペルーはその人口の95%がカトリック教徒である。しかし消費主義が特に若い人々に影響を与え精神の重要性を軽視させている。又、原住民はペルーの山岳地帯、密林地帯に住み言語が多様で教育の普及を妨げられている。彼等は都市への移住を望んでいるが都市に移住してもきわめて貧困に暮らさざるを得ない。都市では貧富の差が大きく上層階級は彼等の間で団結が強いが社会の矛盾の解決に真剣に取り組んではいない。

こうした状況で地方ではカトリックの信仰はそれぞれの部落固有の伝統習慣を伴った迷信とまざりあい、固有のキリスト、固有の聖マリアをもち、盛大な祭の時にはそれらの像を豪華な衣装、宝石で飾るなど民族宗教色の強いものである。1985年2月の教皇ヨハネ・パウロ2世のペルー訪問はペルーのカトリック信者に新しい信仰の道を開いた。福音宣教は全てのカトリック教徒が自身の義務として引き受けなければならない義務であって、その方法は次の様に要約される。

- 1) 無知は、人間を信仰と神から引きはなす第一の障害であるから、これと戦うこと。
- 2) 正義の尊重と暴力の否定、互いに犠牲を払い、皆が必要なものを得られる様努力すること。
- 3) 寛容の態度：人間を一体として考え、キリストの教えの下に兄弟となること。
- 4) 神の創造への感謝。
- 5) 政治への関心を持つこと。

日本

日本のカトリック教徒は全人口12,000万の10%未満である。私達聖心の卒業生は、様々な分野で福音宣教に努力しているが、尚、自分達だけの住み心地よい社会にとどまらず、私達をとりまく社会に積極的に参加し社会への奉仕を通じて、キリストの存在を証明しなければならない。使徒職は、宗教職にある人々だけのものではなく、すべての信者の義務である。

小林の同窓生は、日本におけるカトリック教育の歴史を勉強し、これをレポートにまとめ、又、非常によく研究されたカトリック教育の年表を作成した。こうした年表は他になかなか見出しがたく、将来の研究者に役立つと考えられ、大学の図書館に寄贈された。

カトリック校については、主として在京の18のミッションスクールについて、その歴史、生徒

数、教育理念等を統計的に整理して発表した。一般に日本のカトリック校は日本の高等教育に大きく貢献しているが、更に身体障害者の受け入れなどに積極的に努力する事でキリストへの信仰と寛容の精神を表わすべきであろう。

キューバ

キューバは、1960年代以後、急速に共産化がすすみ、キリスト教会は、危機に直面している。又、他のラテンアメリカの国々も将来共産化されるおそれがある。物質的、無神論的思想の横行する時代において、精神的価値をうえつける場（学校、教会）がなくなりつつある。それに対処するための祈りと行動、初期の教会のような宣教を今、行わなければならない。

イタリア

イタリアの同窓会はヨーロッパに於けるキリスト教の伝播についてレポートを書いた。

ヨーロッパのキリスト教はローマのヨーロッパ諸国の征服に伴って各地に広まりその地の異質の文化の中に融合されていった。そして各地はその文化の固有性を保ちながら共通の規範を作っていた。6～7世紀頃からは僧院が、12～15世紀には各地の大学が文化の担い手となった。キリスト教は各国の国家宗教となり教会は時の権力と結びついていることが多かった。18世紀の特にフランスの哲学は広く普及したがそれはキリスト教の教理を否定したものだ。そして19世紀の半ば頃には教会は以前のような力を失っていた。

しかし教会の役割は文化の違いをのりこえて全ての人々とともに神の教えを分かちあう人間関係を創り出すことにある。

イギリス

聖心会の変貌はイギリスの卒業生を根底からゆさぶり近代社会の新しい問題へ目を開かせた。しかし私達は一步をふみ出す前にまずは祈ることを学び、つましく神と共に歩かねばならない。主の祈りは私達の信仰の礎であり学校教育の根底に置くべきと思うが、現状は全く違っている。キリスト教を国教にしている国であるのに、世間的成功を是とする教育を行っている。宗教教育はかえって教区にまかせた方がよい。

ベルギー

ベルギーではカトリック的、自由主義的、社会主義的な三つの傾向がある。宗教としてはキリスト教、ギリシャ正教、プロテスタント、ユダヤ教、イスラム教が公式に認められている。社会的構造はキリスト教にのっとって順調にしているが教会そのものはおちこんでいる。ミサに出るもの24%と言う数字にもそれは表われている。宗教的な祭日も実施されなくなった。反宗教的なフリーメーソン、又キリスト教に門戸を開いている自由党も反宗教的である。

人々の価値観はキリスト教に基いているが伝統的なキリスト者の生活は下火になっている。が、

一方若い者はある種の宗教的な集会に出てきている。そこに生きる為の価値観を求めているのがわかる。そして持った信念は強くいきいきとしている。

ベルギーに於ける価値観

1. 伝統的価値観：勤勉，デモクラシー，妥協の感覚，良識，他方，小国に見られがちな視野の狭さ
2. 新しい価値観：誠実，確実性，率直，連帯感，第3世界
教育に於ては自習性の尊重，責任観，自由な教育，他人の自由を尊重する複数主義

我々キリスト者は今の現実の社会で何が出来るだろうか？

1. いきいきとしたキリスト教的な社会を作る。それは小さな門戸を開いたグループで実現される。
2. 運命と戦う為と未来をつくる為に自分の信念に基いた人生の目的を持つ。
3. 内面的なものへの価値観と沈黙を見直す。
4. 祭りを復活させる。典礼がどんなに意義ある大切なものであるかを教え或は再教育する。
5. 現状がどんなにきびしくとも幸福なキリスト者となってお互いに愛しあうキリスト者となる事。

テーマ 2：異なる文化の中で暮らす人々

ハンガリー

第二次世界大戦後，政治的な事情から多くの人々が難民となって祖国をはなれた。彼等はその移り住んだ国の言葉や生活習慣，気候に適応を強いられ，様々な困難を経験している。多くの場合，自分の祖国での経歴や職歴と関係のない職業につかなければ生きて行けない。たくさんの慈善団体がハンガリー難民の為に援助の手をさしのべたが，どんな援助も祖国に代わるものではない。聖心の教育は我々の心の支えとなり移住先の国で聖心の同窓生やシスターにお会いできるのは心強い事である。難民や留学生，移民の問題を理解する為には私たちが実際にその立場に立ってみなければならない。私達は40年以上もの難民としての経験があり，今後これを生かして同じように不幸な人々の為にできるだけ事をして行きたい。

日本

日本の聖心同窓会は，在日外国人，留学生，帰国子女，中国からの帰国者，難民等7つのグループの人々について調査を行った。その結果一般的に日本人の社会は，等質性が強く異なる文化を持った人々は，そこに参加する事に多かれ少なかれ困難を感じている事が報告された。我々は自分達と異なる文化を持った人々に対して心を開きその文化を尊敬する様に努力しなければならない。

コロンビア

農耕国であったコロンビアは現在，深刻な人口の都市流出問題をかかえている。これにより，都市部の社会不安，種々の治安の乱れ等も現出し，家庭内の人権問題等も起こっている。これはおそらく，経済的要因に於てのみ，より豊かな人間の生活条件を保障する事ができるという考えによるものである。

その結果，運送手段，公共サービスの不足，教育機関の不足，教師，施設，教材等の不足等，多くの問題が生じている。

都市への人口流出は政治，経済，社会，宗教等，社会構造的なものであるため，その根本原因を解決することが必要である。

キューバ

古い環境をすて，新しい環境に土着するには様々な困難が伴う。政治的理由のため，キューバを脱出し，マイアミに定住した卒業生によって書かれたこのレポートは，自らの経験を元に，移住する人々の理由，問題点について論じている。アメリカに定住するキューバ人に関して言えば，彼等は，自らの努力及び，自らの文化のおかげで高い文化水準を保ち，定着はうまくいっている。彼等は，アメリカに同化しつつも，自らの文化や言語に誇りをもち続けている。特に聖心の教育のお陰で，困難に立ちむかう精神的余裕をもち聖マグダレナ・ソフィアの理想とするつよい女性となれた。

イギリス

急増している移民は信仰の危機にさらされている。私達の文化の基であるキリスト教の精神をこの人々に伝えるべきである。公立学校のあまりにも世俗的な価値観に驚いて自分達の学校を設立した人々もある。

オーストラリア

オーストラリアは原住民がもともと居住していたが，その後ヨーロッパから移住して来た人々が作った複合文化の国である。そこに，更に第2次大戦後に40万人の亡命者と難民を受け入れて，色々な問題が起こって来た。移民には様々な困難がある。言語が通じない為に仕事面で制限を受け，母国で持っていた資格や技術が生かせない。又社会への融合も言葉の壁，習慣の違いで出来難い。又家庭の中では，この国の若い人にあたえている自由を受け入れられない親とそれに同化していく子供との間にずれが生じて来ている。

アボリジニーズと呼ばれる原住民は，又深刻な問題を抱えている。4千年も前からこの地に住みそれなりの生活習慣をつくっていたが，西欧からの移民が居住してから大きな環境の変化に対応できず，人口も大きく減少した。政府が保護にのりだしセツルメントに住むと個々のアイデンティティを失ってしまった。土地の所有権も認められて来ているが，固有の文化をとりもどしな

がら現社会へ融合していくのが今後の課題である。

テーマ 3：世代間の対話

ポーランド

ポーランドの社会経済状態は非常にきびしく殆どの家庭で夫妻とも仕事をもたなければ暮らして行けない。離婚率は千人あたり1.3と低いけれども、それでも50万所帯程の片親の家庭もある。従って子供の世話と家庭教育は、多くの場合祖母にまかされており老人はこの役割を伝統的なカトリック的価値観をもって十分に果たしており、それにいきがいを感じている。住宅事情が悪い事から、二世世代家族が多い事も祖母の家事分担の機会を多くしている。祖母は孫にポーランドの歴史、文化、カトリックの信仰、教義などを教え、近代化に伴う悪い社会的影響から子供を守り正しい倫理道徳を教えて若い世代の人格形成とポーランドの文化の維持に大きく貢献している。聖心の卒業生の間では、聖心の教育が老人の信仰、責任感や愛国心の支えとなっているという意見が多くきかれた。

ペルー

ペルーは世代間のギャップを二つの世代からの対話の形で書いて来ている。

(1) 16歳から18歳までの若者のよびかけ

私達は一見軽薄に見える。しかし大人もかつては若者であった筈だ。そして表面上の違いは互いに違った世界に住んでいる以上仕方ない事ではあるまいか。会話を拒んでいるのは大人であり、大人は若者の間違いのみを見て、信じようとしな。私達に大人の意見を押し付けることなく助け理解し、経験を与えてほしい。そうすれば私達も大人に心を開き自分をかたるであろう。

(2) 35歳から55歳までの女性の答え

私達が、あなた方の年代にどの様に育ったか理解してほしい。私達はあなた方の様に自由をもっていなかったし、又、ほしいとも思わなかった。素直で親に従い、理解してほしいというより、理解するよう教えられた。その代わりに愛と安全と保護を受けることが出来た。そして女性の道は妻となり母となる事で結婚が人間完成への道と考えられた。

私達はあなた方との会話を拒否しているのではない。逆にあなた方が私達の経験と意見に耳をかさず理解だけを求めている。私達は余りに早い時代の流れの中であって、新しい世代を理解し、無理にもそれについていこうと努力する。しかし『ブルージーンズのおばあさん』は、あなた方の生きている時代の一部であり、同じ様によりよき未来を希望している。あなた方が理解を求め様に私達もあなた方の理解と尊敬が外形だけでもほしい。

あなた達のもっている多くのもの、そして自由は、私達の傷で生れたものであり、あなた達のもっている独立は、私達の傷跡の上に建設されたものであるという事を忘れないで欲しい。なぜなら、私達は私達を教育した世代の間違いを貴方達の為になおしてきたからです。

あなたたちにタンゴを踊れとは要求しません。しかし同様に私達に『ブレイクダンス』を踊るように要求しないで下さい。なぜなら、私達のうち誰かが体がバラバラになってそれを治せる外科医がいないということだってありうるからです。私達の限界を知って下さい。私達も貴方達の限界を理解します。

コロンビア

会話をすることが困難なのは、世代の相違のみでなく人間が根本的に持っている『相手の言うことを素直に受け入れられない』という点に起因する。会話は我々にとって非常に重要なものであり、それは共存、他人を信ずること、人格を敬うことに通ずる。

ジュネレーションギャップの要因となっているものは、1) 文明の力の出現により、それまで先人になって学習していた知識を急速に機械によって得ることができるようになった。2) 行動形態が多様化し、家庭の外にいる時間が長くなったため、家庭内のコミュニケーションが最も重要である。

アルゼンチン

40代の卒業生の意見

アルゼンチンの女性は生活のテンポの早さ、多すぎる仕事の量、及び、経済的な条件などから、子供達との会話の量の減少を感じている。

若者との対話を妨げているのは、単にこうした社会状況のみでなく、若者の態度の内にもある。彼等は批判を受けいれようとしない。大人は多大の理解と辛抱を要求される。しかし若い人々は大人が自分達を理解しようと努力し、そのために時間をさいてくれる事を望んでいる。家庭内で両親のそうした努力は子供達を本当に力づけるものである。我々は仕事と家庭を両立させる新しい生活方法を創造しなければならない。

60代の卒業生の意見

私達は高齢の世代と若い世代の仲介をする立場にある。住宅環境が昔の様に広くない為、異なる世代が共に暮らすことは非常にむづかしい。一緒に住んだとしても、若い人々は外に仕事を持ち、育児に追われて老人を振りかえるひまがない。私達中間の年代の者が老人をたずね、又、若い人をも助けている。政府は旅行などを安い料金で提供したり、地域センターをつくり、老人を援助している。

私達卒業生の会はマーテルの家という女性老人ホームを設立しそこには14人の卒業生及びその関係者が入っている。彼等との対話はなかなかむづかしいが私達は彼等を尊敬し理解するよう努力している。

ベルギー

異世代間、すなわち豊かな将来を持った青少年と豊富な経験を持った大人達との対話やお互い

の言い分を聞くことがもっと行われなければならない。ギェスターブ・ティボンさんは世代の差別をすることがいかに残念なことであるかと言っている。その世代間の差別はそれぞれの世代の人々の心を貧しくするものだとも言う。

たしかに過去数十年の間に生存条件は著しく変わった。住居はより狭くなり、老人達は子供達と一緒に住まなくなって、独立するか老人ホームで暮らすようになっていく。子供達についていえば母親が働くために両親と一緒にいる時間が少なくなり、ごく小さなときから保育所や託児所に預けられるようになっていく。

子供の数が減少していることもあって、大人は自分の住んでいる社会にもっと関心を持つことができるようになっていくのではないかと。とにかく援助される者と援助する者しかない社会を作ってはならない。特にこれからのように若い者が少なく老人の数が多き社会にあってはなおさらである。

若者とそうでない者との対話——これは違いを認識して相手を認めなければならないのだから難しいことではあるが——相互理解の上にならなくて世代間の協力関係を生みだしていかねばならないのである。

コスタリカ

世代間の対話の困難な原因

- 1) 若い世代は自己のアイデンティティを発見する為、年上の人々に反対している。
- 2) 自分達の実行していない行動の規範を若者におしつけようとする年上の人々の偽善。
- 3) 急速な時代の変化に年上の人々が適応できず、現代社会と若者の心に対する彼等の無理解。
- 4) 絶対的価値と一時的な相対的価値に区別をつけられない事。
- 5) 年上の人々の権威の失墜。
- 6) 経験を持った大人の意見を受け入れぬ若者の思い上り。

対話を開く為に必要な努力

- 1) 大人の若者への誠実さ、真のキリスト者たる実証。
- 2) 愛と規範と相互の尊敬による家族のきずなの強化。
- 3) 若者の意見を聞く寛容さ。
- 4) 若者におしつけるのではなく、彼等が自分の良心と自由をもって正しい動機を選ぶようにしむけること。
- 5) 会話への努力。

メキシコ

世界大戦以降、価値観は多様化し、若者と大人の精神的ギャップは深まるばかりである。若者は、アイディアと想像力にあふれ、刺激を好むが理解力、組織能力に欠けている。

私達は対話の機会を見出す為には心からなる愛情をもたなければならない。それは若者への理解

につながる。家族はその場として最も大切である。家族の中で基本的な価値が伝承されて行く。先ず努力されるべきは、家族のレベルにおける学習であり、それが社会生活の領域にまで広がって行くべきである。

U. S. A.

アメリカでは、聖心の高齢のシスター方の為に4つの修院があり、地域の卒業生が色々な面で奉仕している。そこでは年とったシスターと若い卒業生の間に会話の困難さは感じられない。

ある高齢のシスターが他のシスターに語った気をつけるべき点

- 1) たずねてきてくれた人と自分を同レベルにおこうとしない事。
- 2) ティーンエイジャーの真似をする事はないが、いつも心を若く保ち、現代の音楽や新しい小説を読む事。
- 3) 身だしなみよく人に服装などで不快を与えぬ事。
- 4) シャベリすぎないこと。Yes, No, Ah, の三つをうまく使えば十分である。

日 本

日本は少なくとも卒業生の間では世代間の差より生活環境の方が大きく感じられる事を結論した。マスコミの影響、女性の就業、高齢化社会等について話しあったが、互いに立場を認めあい、尊敬しあう事が必要である。

グループ・ディスカッションの内容報告

予め用意し、配付したディスカッション・トピックスに従って、18のグループに分れた参加者が各々のテーマについてディスカッションを行った。1グループの参加者は、平均20～30名前後で非常に活発な、且、和気あいあいとした雰囲気の中で行われた。

以下は三つのサブ・テーマの各々について話されたことの要約と結論である。各々のサブ・テーマは六つずつのグループで別個に話合われ、ディスカッションの後、司会者とテーマ委員がまとめ各々のサブ・テーマから一人の代表者が参加者にその結果を発表した。以下はその発表とまとめのミーティングで話されたことをテーマ委員が要約したものである。

I キリスト教国における、或いは非キリスト教国におけるキリスト者

1 カトリック校に何を求めるか。

各国における現状、将来に向けて何を望むか。

カトリック校は、ごく少数の国を除けば、世界的に閉鎖・廃校の現象が多く報告され、一時期の最盛を越えたと言えよう。この原因は需要面と供給面の双方にあると思われる。世界情勢の変化、価値観の推移により、カトリック校の存在価値が薄れており、又カトリック校側としては、修道者の減少、外部機関よりの援助の欠如により、きめの細かい特徴のある良質な教育（宗教教育を含め）を提供することが困難となっていることである。

社会のカトリック校の需要と、カトリック校の特徴ある良質な教育の供給という両面は、密接な相互関係にあり、カトリック校はその教育を通じて社会の価値観に影響を及ぼすことが可能であり、又それによってカトリック校の存在価値が高まるのである。例えばキリストの愛がすべての人に、そして特に弱い者に示されていることを考えると、障害者の受入れなどは、カトリック校が早急に率先して行うべきことであって、そうした努力によってこそ、カトリック校の存在価値がより堅固になるのではないか。

この為に、聖心の卒業生はより深くカトリック校の教育と経営に関わり、修道者の不足している場を一般信徒として固有の力を持って補い、直接教育に従事することを始め、家庭においては子女の基本的宗教教育に努め、又経済的にも学校経営を支援する等が出来よう。

2 福音宣教をどう実践するか。

①AMASC会員は何ができるか。

- a) 福音宣教は、まず私達自身が始めなくてはならない。自分が種々な意味で改宗を経験して初めて「証人」となることができる。喜びやおそれ又キリストとの出会いを互いに分かちあうことにより他人を改宗させる前に、自分自身を改宗させなければならない。何をするか何を言うかよりも、どう生きているかが大切である。
- b) 個人的人間関係を通しての福音宣教

福音宣教とは個人と個人のふれあいを通じてなされるもので、無味乾燥な教義の押しつけや道徳的に正しくなければ神から愛されないという考えは妨げとなる。

愛を示すことが最も重要である。

c) グループに支えられる福音宣教

教会内には多くのグループがあり、各グループを通して福音宣教が支援される。若者、既婚者、友人、高齢者等各々のグループの持つ特色を生かして福音宣教を助けるべきである。

d) その他

キリスト者はキリスト者のみの囲いの中にいないでより広く外部の集まりに積極的に参加すべきである。

福音宣教を妨げるものとして教会内での男性の優位の傾向が論じられた。

②若い世代をどのようにして教会にひきつけるか。

若者の場が教会内にあり常に彼等も意見を求められているのだという雰囲気が必要である。又教会内のコミュニケーションをよくすることも大切ではないか。(ニュースレター等を通し)

③土着化のためには何をしているか、又意味があるか。

この問題は各国により相当の差があるが主に②の若者の問題も含めて次の二点が論じられた。

a) 典礼の問題

どのような年齢層であれ、文化的背景の人々であれ、違和感のない典礼が望ましい。つまり、バラエティーに富み、どこかに自分達にしっかりといく典礼を望んでいる。又典礼への一般信徒の参加が望まれる。

b) 祈りについて

これも又、様々な形の祈りがあることにもっと気づくべきである。グループで祈る東洋的祈りの方法、沈黙の内に祈る等。

3 各国において他宗教との対話があるか。

徐々に行われているが、もっと積極的に行うべきである。

特に他宗教に見ならうべき点に気づくこと、例えば新興宗教の持つ信徒の間の仲間意識、又、これこれをすれば必ず救われると言った様な解り易い教義、等。

又、他宗教の人々と共に何かをするということが対話の助けになる。(ユダヤ教の人々と共に聖書研究をしているグループがあり、成功している)

II 異なる文化の中で暮らす人々

このテーマについて六つのグループが行なったディスカッションの内容は、次の四項目にまとめられると思われる。

1 異なる文化の中で暮らす人々が各国で持つ社会的、経済的問題。

2 自分達の文化や独自性を維持しつつ、現在生活している文化の社会に、いかにして適応して行く事ができるか。又、そうした人々の適応をどのような方法で具体的に助けることができるか。

3 異なる文化への適応を余儀なく体験させられる子供達の問題。

4 結論として我々はいかにして文化間の相違からくる社会的な問題を解決していけるだろうか。

1 各国における異文化を持つ人々の現状

多かれ少なかれ、どここの国でも異なる文化を持つ人々は社会的、経済的な困難を経験している。そうした人々が差別を受けているというだけではなく、彼らの存在は彼らが現在住んでいる社会にとって大きな問題である例が多く報告された。例えばヨーロッパ、特にフランス、イタリア、スペイン等ではアラブ系の人々の移住の増加が大きな問題となっている。南フランスへのアルジェリア人の移住は年々増加しており、彼らは集団で暮し自分達の文化以外の生活様式を身につける事がなかなか難しい。フランス人にとって彼らの流入はまさに侵略なのだが、彼らは非常に貧困で教育程度も低く自国からあふれてきた人々で行き所もない。イタリアでもアラブ人が同様の状況にある。オーストラリアでは原住民が未だ後から入ってきて支配的となった西欧文化に充分適応できず政府の保護下にある。アメリカでは未だに多くの移民を受け入れているが、人種差別が解消しているとは言えない。

一般的には異なる文化で暮らす人々の文化適応は、(1)その人々が社会的にどのような階層に属し、どんな国に移り住んだか、(2)その人々の経済的条件と教育程度、によって大きく異なる。留学生、外国駐在員など社会的地位の安定した人々にとって異なる文化との接触は視野を広げ経験と知識を豊かにするものであるが、下層労働者、難民等にとっては適応より差別の方が大きい。又オーストラリア、アメリカの様に異文化をもつ人々に対する処遇に社会一般が歴史の過程でなれている国では摩擦が少ないが、ヨーロッパ諸国の様に長い伝統と独自の文化を持つ国では困難が多い。教育程度の低い人々や経済的に恵まれない人々が異文化の中で経験する困難がより大きいことは勿論である。こうした人々は自分達が不幸だけではなく異なる社会へ侵入し、そこの人々の仕事を奪うものと考えられ、双方にとってフラストレーションの原因となっている。

2 自分達の文化を維持しつつ、いかにして現在暮している社会と、その文化に適応していくか

多くの場合異なる文化の中で暮らす人々が自分達の固有の文化を維持しつつ、現在暮している社会の文化に適応していくのは仲々難しいことである。日本におけるインドシナ難民や中国からの帰国者は、その例であろう。AMASCのメンバーは大多数がこうした人々を受け入れる立場にあるから、いかにして彼等の適応を助けられるかという側面が主に話し合われた。最も一般的には自分達とは異なる文化の知識の普及が必要であろう。その為には交換留学生の数を増やし、その受け入れに積極的であること、小・中・高校生レベルでペンパルを広く外国に求め合うことがあげられた。ベルギーなどではアラブ人の女性の為にクラスが組織され、裁縫、料理など西欧的

生活様式を教え逆に彼等の料理なども伝えてもらうという相互交流の場として成功している。

3 親の外国への移住、転勤等に伴い異なる文化への適応を余儀なくされる子供達の問題

この問題は特に日本人から提起された。いわゆる帰国子女は外国での文化適応より、日本へ帰国した後、日本の学校生活への適応に困難がある。日本は異なる文化を持つ人々の排他的態度が強いのである。しかし参加各国でも外国で成長した子供達の自国への適応は問題が多く、国際交流が益々増加している現在、この問題は各国共通のものになりつつある。「相違」の排斥は異なるものに対する「いじめ」を生む。日本では最近「いじめ」が教育界で大きな問題としてとりあげられているが、帰国子女のみならず「いじめ」の対象となるのは何か一般と異なる要素を持った子供であるらしい。他方子供達は往往にして異なる文化の中で、その社会と彼等の親達をつなぐリンクになることがある。例えば移民の子供達は新しい社会の言葉や習慣を大人ほど抵抗なく受け入れ、それを親に伝えている。こうした役割を持って子供達は、その柔軟な生活態度の故に異文化間の交流の第一歩を大人に与える存在である。

4 結論

私達は、すべて見知らぬもの、未知のものに対し、おそれをいだいている。そして、おそれているものを排除しようとする。それが異なる文化を持つ人々に対する差別の根本にあることは各国共通である。現代はマスメディアの発達と共に外国の情報は多く、外国の風景や人々の生活をテレビで見ることができる。従って私達は「異なる文化」、「未知の文化」をもっと身近なものとして受けとめられる筈である。未知に対する寛容と尊敬の心を育てることこそ、お互いの文化適応の困難を解決する根本的方法である。今日あらゆるものはお金で値ぶみされるけれども、もの持つ本当の価値について考える人は少ない。私達は値段を知っているものだけを大切にすることはなく、値段を知らないものの価値をも認識して心を豊かにして行きたい。

Ⅲ 世代間の対話

1 女性の就業が家庭に与える影響はなにか。

①女性の就業の理由

女性が家庭外で働く理由として第一にあげられるのは経済的なものである。今日の社会的状況に対応し生活水準を向上させ、よりよい教育を子供に与えるために女性はしばしば夫と共に経済的負担を背負わなければならない。

第二に消費文化や電気機器の進歩により、家庭内労働（料理、掃除、洗濯等）は単純化され過小評価されるようになった。その一方、経済力に評価の重きをおかれ、その結果女性は社会的評価を得る為に家庭外へ進出する様になった。

第三に自分の向上を図る為の手段として職業に就くことを選ぶようになった。

第四に家庭内の発言力を強化する為には夫と対等な経済力を持つことが必要である。社会においても様々な行動の決定を男性に依存するのではなく独立した人間として行使する必要があると感じている為でもある。

第五に家庭労働の軽減から女性の余暇が増加し、それに伴いマスメディアの影響を大きく受けていることなどが考えられる。

②女性の就業が家庭にもたらした良い影響

子供が社会人としての母親に誇りをもち母親を単に家庭の中の当然の役割をする人ではなく一人として認めるようになる。又、母親が外で働く結果、家庭の仕事に家族全体の協力が必要となり家庭のきずなを強める。母親は社会とのつながりを持つ結果、視野を広げ子供にとってよりよい教育者となり得るばかりか、自分の仕事が満足すべきものであれば充実した前向きの人生を歩むことができる。

③悪い影響

女性の就業の結果、今日子供の数は減少し女性が経済力を持つことにより離婚が増加している。又家庭を築くことを目的とせず相互の一時的な便宜の為の同棲が増加している。つまり家庭の崩壊が進んでいるといえよう。又、夫や子供と接触する時間が減少し、女性の家庭における役割も以前の受身的なものから積極的に自分の立場を主張するように変化している。但し女性の社会的変化にかかわらず男性は従来の優位を譲ろうとしないため、女性は家庭の外と内に二重労働を強いられるのが現状である。

④対応策

女性の就業の有無にかかわらず子供にとって母親の必要性は看過できない。母親は接触の時間の減少を質で補うように努力しなければならない。又、時に母親本人が不在でも母親に代わる人の存在により対処できよう。

2 情報化時代が各世代に与える影響

この問題はテレビの功罪を中心に論ぜられた。テレビの意義については意見が大きくわかれた。ひとつはテレビは良くも悪くも利用できる一手段であるという意見、他方テレビは手段ではなくメッセージであるという意見である。後者の場合このメッセージは一方的であり対話を伴うものでないことが指摘された。

テレビの長所として次の様な点があげられた。

- (1) 高齢者にとって娯楽としてもまた自分達が参加できる機会が少なくなっている社会とふれあう為にも非常に有用である。
- (2) 教養番組の有用性。
- (3) テレビ大学を利用すれば単に知識を修得するだけでなく学位を取得できる。
- (4) テレビを通じ遠い国々の社会情勢が間近になり対応できる。（エチオピアの飢きんなど）

テレビの短所については主に次のようにまとめられる。

- (1) 子供に対し不用意な場面が多い。暴力、セックス場面が氾濫している。
- (2) 子供達の創造力の発達を妨げる。
- (3) 家族間の対話の時間がテレビの為減少する。
- (4) 政治的商業的に世論を操作できる。

3 高齢化社会にいかに対応するか。

この問題については十分にまとめる時間がなかったが、高齢化社会に対応する為にも大切なことは一言でいえば愛である。

一つの対応策としては女性の就業から必要となる子供の世話を高齢者に託すことで世代のつながりを作ることがあげられた。子供は高齢者との対話を通して生命の意味、死の意味を学ぶことができる。高齢者は子供達から新しい情報を得ることができる。すべてのひとの存在にはかけがえのない価値がある。特定の世代に特権が集中したり、あるいは責任が課せられるべきではない。

対話とは二者の話し合いではなく、二者の出会いとならなければならない。

A. M. A. S. C.

第8回 AMASC 世界大会決議文

1986年3月

第8回AMASC世界大会の準備と同大会への参加を通じて異文化間のコミュニケーションを体験し、よりよい、より人間的な世界を築こうとの努力のもとに結ばれた世界聖心同窓会会員は

——自らの文化圏の中の「必要とされない存在」に友情を以て個人的なかかわりを忘れず手をさしのべ続けること

——時代のもたらす新しい状況の中で、福音の一人一人への呼びかけに応え、めぐり会うすべての人々に信仰と喜びを願つこと

——あらゆる世代の人々がそれぞれ世界のために何が出来るかを探り、励まし合うこと

——聖心会のシスター方と協力し、広い意味でのキリスト教的教育に対し、道徳的・心理的に、又あらゆる適切かつ実際的方法で助力を惜しまぬこと

を決意する。

C.S.A.M.A

AMASC 世界人異州 ORAMA

世界人異州

発行 1987年9月1日
編集 日本聖心同窓会 (JASH)
〒150 東京都渋谷区広尾4-3-1
宮代会館内
電話 407-1971